

岐阜・愛知の若年層方言について 1

遊びのことば・学校のことば・オノマトペ

On some dialectal words and phrases used by the younger generation in Gifu-ken and Aichi-ken 1

山田 敏 弘

YAMADA Toshihiro

1. はじめに

方言が、伝統的な語彙だけに限ったものではなく、現代においても、若い世代には若い世代なりの方言があることはすでに説明する必要がないであろう。

本考察は、平成19年度前学期に、岐阜大学の教養教育「言語学 岐阜県方言のしくみを学ぶ」において得られたデータを中心に、岐阜県ならびに愛知県、主に若年層が用いている方言を、地図とともに示し分析していくものである。取り上げるのは、チーム分けジャンケン、「警察と泥棒」「ポコペン」、「いちにいさんまのしっぽ…」という数え歌、「仲間に入れて」というときの言いかた、「ケッタ」と「チャリ」などの遊びの方言、学校の休み時間の呼びかた、「一号車」、「班交流」、「漢字ドリル」と「計算ドリル」の略称、「屋内運動場」というかどうか、「うわばき」と「うわぐつ」などの学校の方言、鉛筆の先がとがっているさま、カレーライスの水っぱいさま、満腹状態に対するオノマトペである。併せて、自称詞と対象詞、テオクの用法、推量表現、確認要求表現、否定表現など、いくつかの文法項目についても調査したが、紙幅の都合から次号において考察をおこなうことにする。

調査はいずれも、平成19年4月から7月にかけて、岐阜大学の教養教育言語学 において、約160名の学生から得たデータを中心としたものである（一部に、教育学部「小学校教科国語」受講者に対して同年6月におこなった250名ほどに対する調査結果を含む）が、データには2通りのものがある。ひとつは、受講者自身に対するアンケート結果から得られたものである。当該授業では出席の代わりに毎回方言に関するアンケートをおこなったが、自分自身について回答するものであるため、相対的に見て信頼度が高い。もうひとつは、受講者自身が宿題として次の週までに調べてきた



地図1 主な地点

結果を集約したものである。場合によっては、共通の友人に聞いてしまい同じ人の回答が複数回のデータとなっているということもある上、その地の生え抜きの人に必ずしも調査を絞れていないという点も気にかかる。また、平成の大合併前の旧町村名で出身地を聞いて調査することとしてあったにもかかわらず、新町村名で答えている場合があるなど、データの信頼性に関しては、やや劣ると言わざるを得ないものである。

本考察では、そのようなデータの質について、個々の考察において明記することで、そのようなデータであることを示し、それでもおおまかに読み取れる現象を見ていくことにする。

なお、市町村区画は、平成の大合併前のものを原則として用いることとするが、記述の中では現在の市町村名も併記する。また、岐阜大学へ通う学生の出身地がおおよそ岐阜県と愛知県に集中していることから、岐阜と愛知の2県をつなげた地図を用い、その上に使用語形を示し、岐阜と愛知との違い・連続性を見ていくことが中心となる。本考察で言及する市町村についての略図は前頁のとおりである。

2. 遊びの方言

若年層世代において、もっとも地域差が現れやすいのが、遊びや学校単位で用いられている方言である。今回、このような語彙ならびに表現について、多くの方言語形を得ることができた。

なお、本節に関しては、小学校ごとの詳細なデータを得るために、岐阜大学教育学部小学校教科国語の授業受講者約250名の結果も合わせ、総勢400名ほどのデータに基づき作成した地図を用いることもある。

2.1 チーム分けジャンケン

ドッチボールや野球など2つのチームに分かれてする遊びは多い。そのときのチーム分けの方法にも方言差がある。当地で用いられるもっともポピュラーな方法は、ジャンケンを変形させたもので、チョキとパーのいずれかを出さないことにより二者択一をおこなわせるものである。結果としてゲーとチョキ、あるいは、ゲーとパーによる選択によってチーム分けが可能になる。当然、ゲーとチョキを出すかゲーとパーを出すかの違いがあることになる。

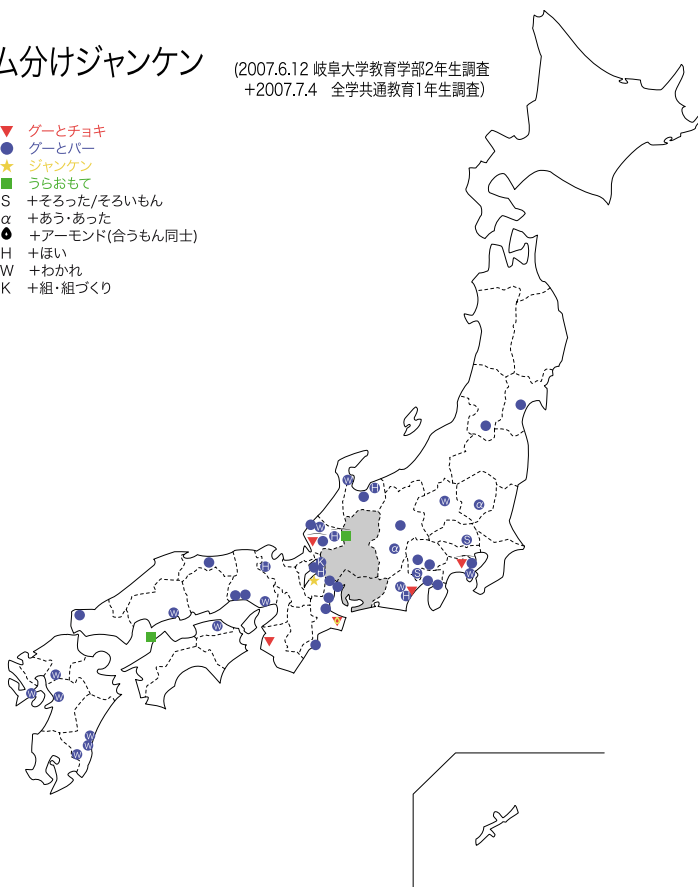
全国の分布について、ゲーとチョキを用いるのは、神奈川県横浜市、静岡県焼津市、三重県伊勢市、和歌山県金屋町で見られたほか、福井県武生市でも併用語形のひとつとして現れたのみであり、やはり少数派であった。全国的にはゲーとパーを用いるパターンが広範囲に確認された。また、「うらおもて」は、愛媛県温泉郡と福井県勝山市に見られた。

ゲーとパーを用いる地域について、この地図では、詳細を表すことはできないが、「わかれ」「わかれましょ」などのことばを入れる地域（地図上ではWの文字を の中に組み合わせてある）が、特に西日本

チーム分けジャンケン

(2007.6.12 岐阜大学教育学部2年生調査
+2007.7.4 全学共通教育1年生調査)

- ▼ ゲーとチョキ
- ゲーとパー
- ★ ジャンケン
- うらおもて
- S +そるった/そるいもん
- α +あう・あった
- +アーモンド(合うもん同士)
- H +ほい
- W +わかれ
- K +組・組づくり



地図2 1 チーム分けジャンケン(全国)

チーム分けジャンケン

(2007.6.12 岐阜大学教育学部2年生調査
+2007.7.4 全学共通教育1年生調査)



地図 2 チーム分けジャンケン (岐阜・愛知)

については、愛知県尾張地方北部に「そろった」「そろい」「そろいもん」などSで示した表現が続く地域がかたまっている。岐阜県内では、可児市や羽島市に分布しているが、これらは、やはり愛知県から入ったものである可能性が高い。一方、名古屋市から尾張地方南部、さらに三河地方にかけて「あわせ」を含む表現が連なって現れている。名古屋市内では、ちょうどこの2形が南北に分断されて勢力争いをしている様相が見て取れる。愛知県三河地方でも、岡崎市、豊橋市、豊川市には「あった人」を含む表現が見られる。全国的には先に述べたように東日本に点在する語形と思われるが、関連性を述べるまでの証拠は今のところ見られない。岐阜県では、現郡上市となった八幡町、大和町、白鳥町で、ジャンケンと同じかけ声である「ほい」を最後に付けるパターンが見られる。北陸地方へのつながりも検証を要するところである。

には多く見られたほか、長野と栃木に「グーとパーであった人」(地図ではα)が見られた。これらは、岐阜・愛知で採取された語形との関連で後述する。さらに、少数語形で特異なものとしては、「グッチパーでヨーロッパ」(滋賀県長浜市)、「グッパでおーだーま」(福井県坂井郡)、「ぐっばのやんさーほい」(富山県滑川市)などであるが、詳細は不詳である。

岐阜と愛知については、左のようになった。地図¹⁾では、出身小学校の所在地におおよそ合わせてプロットしてある。

で示したグーとチョコキによるチーム分けは、岐阜市を中心に、岐阜県美濃地方西部に広く分布する。愛知県では少数派となっているが、広範囲に見られる点には注意が必要である。

グーとチョコキを用いるか、グーとパーを用いるかは、単に出すサインの違いにとどまらず、グーとパーは、その後続くことばのバリエーションが豊富であるのに対し、グーとチョコキはそれほど多くないという違いにも現れている。グーとパー

1) 印刷物として刊行されたものでは、地図は白黒になっていることに加え、解像度が十分に得られるか、原稿作成時にはわからない。同時に刊行され岐阜大学教育学部のホームページにもリンク予定のpdf版においては、地図もカラーで示され、pdfの解像度によってはより鮮明な画像が得られる可能性もある。併せてこちらもご覧いただければ幸いです。

なお、小学校の位置は、GISソフトは使用せず、おおよその位置を地図から読み取って判断し位置づけたものである。多少の位置のずれがあることを承知おき願いたい。

グーとチョコキで興味深いのは、大垣市西南部に見られる「グッチーアーモンド」である。「アーモンド」については、回答した何人かがなぜ「アーモンド」というのかわからないと書いていたほど語源意識が薄れている地域がある反面、明確に「合うもん同士」であると書いていたものもいた。まさに大垣市内が変化過程にある様相が見て取られた形式である。一方、「アーモンドシード」という形式まで採取された。「どうし」が「シード」になるなどは、単なる音位転換ではなく、「アーモンド=種」という意味の関与の可能性が強く推察される。この語形については、三重県伊勢市出身者からも（「アーモンド」ではなく）「合うもん同士」という語形が採取された。福井の「おーだーま」も「合うたもん」であることから、広い分布も可能性として考えられる。

チョコキに関しては、形が「ピース」に似ていることから、「ピー」と表現する箇所が何力所か確認されている。特に集中して現れるのは、愛知県の尾張地方西部や、小牧市、名古屋市南部であるが、ほかに、高浜市・安城市、渥美町（現田原市）まで点在して見られる。特に、吉良町や豊川市のグーとピーは、チョコキを使いつつも、近隣の「あわせ（A）」と組み合わせられるなど、接触域での混交形としての特徴も有している。また、グーと「ピー」を組み合わせることから「グッピー」となり、「グッピーラムネ」という語形も佐織町西川端小学校で確認されている。当地域には、名古屋市西区に本社のあるカクダイ製菓が製造している（濁点のない）「クッピーラムネ」が多く流通しており、これがチーム分けジャンケンのかげ声に影響を与えた可能性は高い。

さて、これらの語形を総合して考えるに、岐阜と愛知のチーム分けジャンケンについては次のようなことがわかる。まず、もっとも古い語形と考えられるのは「うらおもて」であると推察される。もちろん、歴史的な証言を十分に得ていく必要はあるが、周辺部に分布する状況²⁾から考えれば、「うらおもて」がもっとも古い語形のひとつであることは間違いないであろう。次に、飛騨地方にも広く分布するグーとパーが古いと推察される。これは、揖斐の久瀬村にも見られることのほか、谷汲中でも以前報告があったことに加え、この古いグーとパーは、郡上の「ほい」、飛騨の「組作り」を除き、工夫がそれほど施されていない「グッとパ」など比較的形が単純であることも特徴的であることも傍証となる。

岐阜市周辺のグッチーは、おそらく愛知県にも広く分布していた、やはり岐阜・愛知の共通語形であったであろう。その上に、「合わせ」や「そろい」などを含む名古屋から新しいグーとパーが広がっていったものと推察される。

子どものあそびの語形の変容は、比較的短期に進む様子が観察される。今後、このような仮説が正しいかはこのような変容の推移を見ていくことによって検証されていくであろう。

2.2 「警察と泥棒」

「警察と泥棒」は、2つのチームに分かれて鬼ごっこをする遊びである。筆者が小学校の頃の1970年代にはやった記憶がなく、少なくとも当地においては比較的新しい遊びかと思われる。

この遊びの名称は、「警察と泥棒」としたが、実際には「ケードロ」と呼ばれたり、逆に「泥棒と警察」の略である「ドロケー」と呼ばれたりもするほか、「泥棒と巡査」の略である「ドロジュン」とも呼ばれる³⁾。

まず、おおざっぱな分布を見ていくと、岐阜県内では全般的に「ケードロ」が優勢であり、それは愛知県三河地方でも同様である一方、名古屋市では「ドロケー」が優勢である。岐阜県内でも、垂井町や美濃市、郡上市八幡町などでは「ドロケー」が優勢であるが、いったいこのことが意味を持つのであろうか。

地域的な偏りは、一般には、交流と断絶によって生じるものであると考えられる。伝統的な方言形式な

2) この点については、東濃西部の瑞浪市、土岐市、多治見市においておこなわれた水野由加里（2004）の調査結果が参考になる。水野（2004）では、特に、土岐市において、中央線から離れた下石町、駄知町、妻木町、曾木町に「うらおもて」が分布し、反対に中央線沿線にグーとパーが分布していることを報告している。詳しくは、山田敏弘編（2007：82）を参照のこと。

どは特に、交流のあるところでは同一の語形が用いられ、自然障壁や人為的境界など、その交流の及ばない範囲とは異なる語形が用いられると考えられるが、このことは、この「警察と泥棒」のような子どもの遊びでも言えるのであろうか。

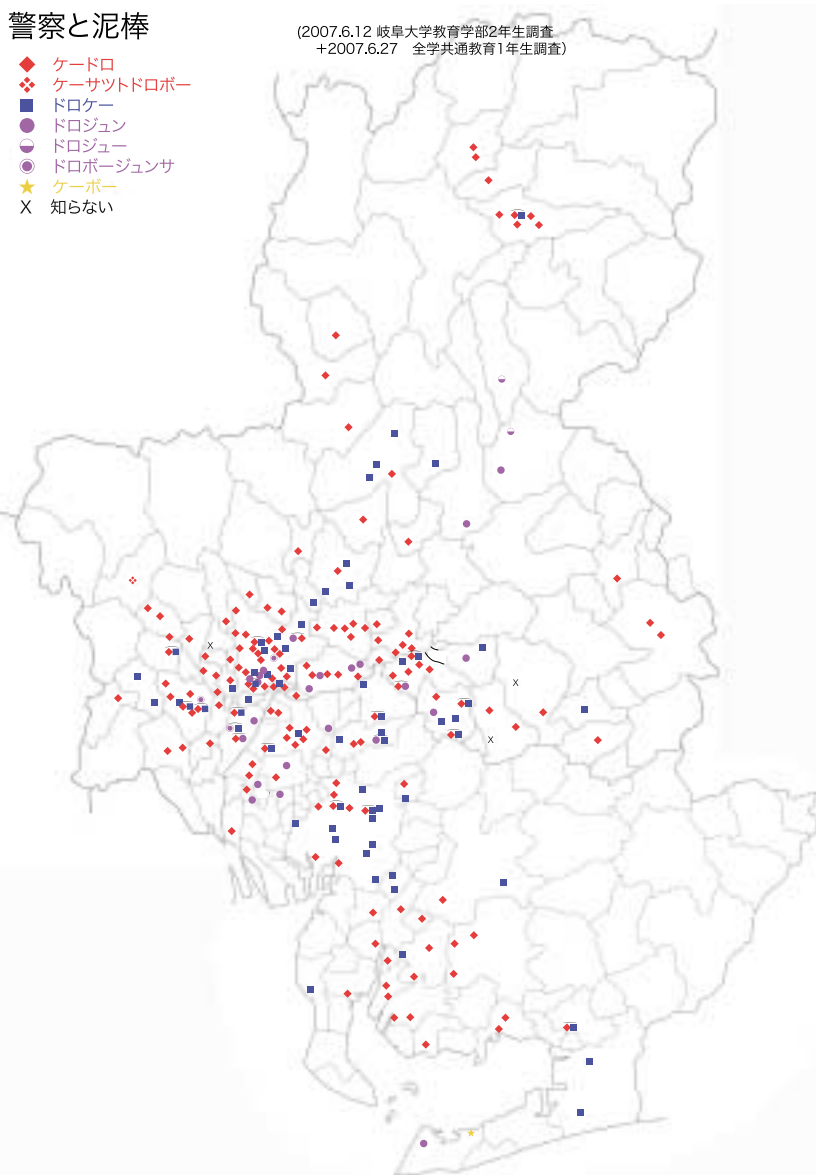
確かに岐阜市の東隣に位置する関市や美濃加茂市では「ケードロ」のみが確認された。このような範囲で同一の語形が分布することは交流範囲によるものと考えられなくもない。しかし、たとえば、岐阜市内で、長良東小、長森東小がそれぞれ「ドロケー」を使うのに対し、長良西小、長森西小で「ケードロ」が用いられることはどのように説明が可能なのであろうか。偶然、回答者がそのような答えただけであるという可能性については、長良東小と長良西小との間で転校した経験をもつ学生からの「転校したら名前が変わった」という証言によって、少なくとも、長良地区においては、より徹底した名称の違いがあったものと考えられる。隣接する校区で名前が異なることは、

それぞれ小学校校区単位を超えて遊びを共有するというよりは、やはり学校単位で名称が共有されれば子どもの世界では事足りて、それ以上広域で共有される必要性がないことを示しているものと考えられる。

また、「ドロジュン」に関して言えば、「巡査」が「警察」よりも古い語形であるとの感覚で受け止められている事実はあるが、必ずしも都市部よりも周辺部に、「ドロジュン」が分布するとは言い切れない。むしろ、岐阜市内においては、都市中心部に「ドロジュン」が比較的多く見られる上、短縮されていない「ドロボージュンサ●」が大垣東小および岐阜市の京町小というもっとも都市部の学校に分布しているという事実が確認された。このことから考えれば、新しい語形ほど中心部に分布するという方言圏論は当てはまらない。

一方、略さずに呼んでいる地点のほうが、周辺部であるということも観察された。今回の調査では、揖斐川上流の久瀬村のみであったが、「ケーサツドロボー」という省略されない形式が見られた。

これらのことから考えると、近隣地で取り入れられるときに、名称と遊びの内容が同時に取り入れられ



地図3 警察と泥棒（岐阜・愛知）

3)「巡査と泥棒」の順序である「ジュンドロ」は静岡県出身者からは証言を得ているが、このエリアの出身者からの証言としては今のところ確認されていない。

るといよりは、遊びの内容がまず取り入れられ、その内容から再命名がおこなわれている可能性は少ない。

このような遊びの名称については、次節の「ポコペン」と併せて後述する。

2.3 ポコペン

ポコペンについては、すでに一度、山田(2005)で報告をおこなっている。基本はかくれんぼであるが、最初に鬼を決めた後に、その鬼が交替するチャンスがある点でふつうの鬼ごっことは異なっており、その鬼交替の儀式の際に歌われる「ポコペンポコペンだれがつつついた(ほつついた：地図中ではHで示す)」という歌に特徴がある。

今回、新たに、ポコペンという遊びの有無、ポコペンで缶を使ったか否か、鬼替えの儀式の歌があったか、歌があったとすればどのような歌であったかについて調査をおこなった。

結果として、岐阜・愛知の出身者130名ほどから得られたデータを小学校ごとにプロットしたものが次の地図である。

前回の報告と少し異なるのは、岐阜市近辺などでも「最初に」や「最後に」といったつついた人を指定することばが多く見られるようになってきていることである。前稿でも報告したように、このような指定は愛知県に相対的には多く見られる遊びの工夫の一種であると考えられる。おおよそ3年の違いであっても、岐阜へ愛知の遊びが進行してきている様子が見て取れる。

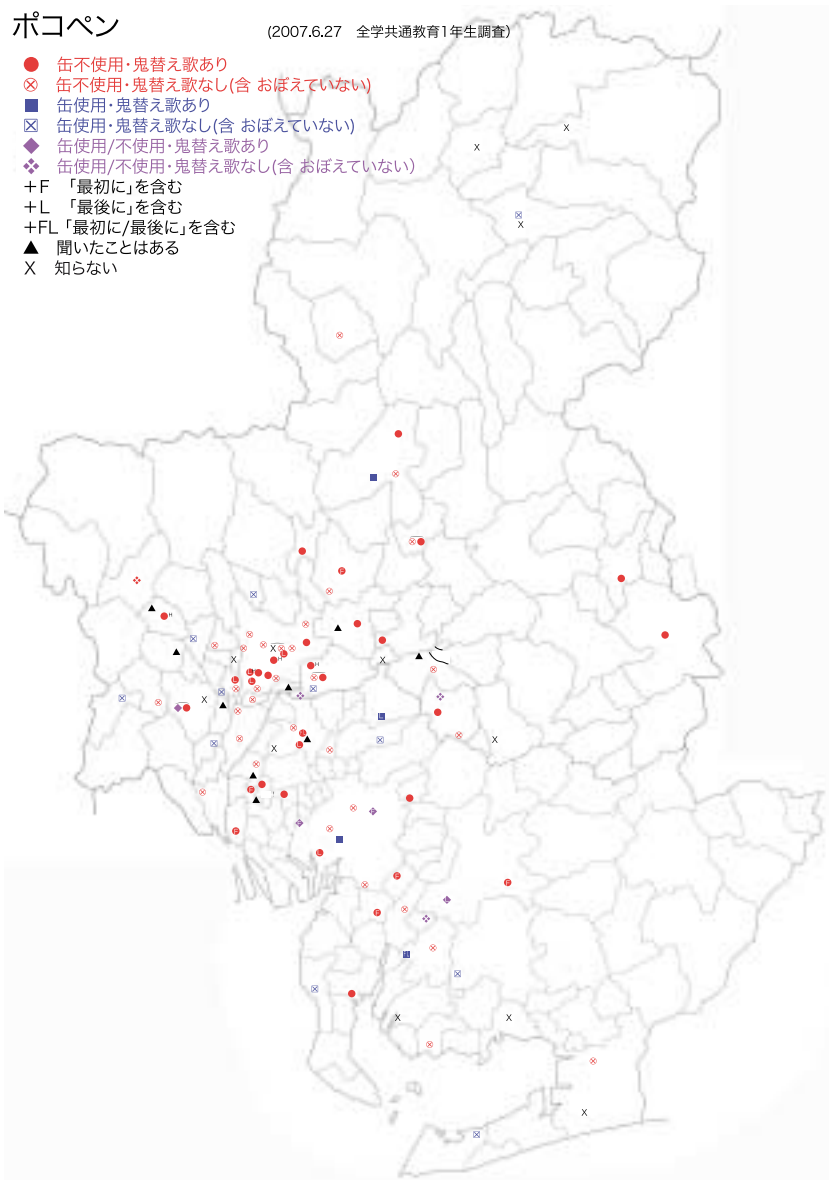
その一方で、缶を使用するという答えは岐阜市には見られず、むしろ、大野町、伊自良村(現山県市伊自良地区)、輪之内町などの周辺部に見られることには注意を要する。これも、ケード口の場合と同様、分布としては古形が周辺部には残らないパターンと考えなければならない。缶を用いるパターンがどこから入ってきたのかは定かではないが、秋本治著『こちら葛飾区亀有公園前派出所』において缶を用いてポコペンをやっていたという話が出てきていることから考えると、必ずしもこの地方のポコペンとの関連性が当初からあったものではない可能性がある。

前節の「警察と泥棒」と併せて考えると、子どもの遊びとその名称との関係は、名称自体の変化とともに、遊びかたの変容とも併せて考えていかなければ

ポコペン

(2007.6.27 全学共通教育1年生調査)

- 缶不使用・鬼替え歌あり
- ⊗ 缶不使用・鬼替え歌なし(含 おぼえていない)
- 缶使用・鬼替え歌あり
- ⊗ 缶使用・鬼替え歌なし(含 おぼえていない)
- ◆ 缶使用/不使用・鬼替え歌あり
- ◇ 缶使用/不使用・鬼替え歌なし(含 おぼえていない)
- +F 「最初に」を含む
- +L 「最後に」を含む
- +FL 「最初に/最後に」を含む
- ▲ 聞いたことはある
- X 知らない



地図4 ポコペン

ならないことを示唆するものである。くみ取り式の便所であれば「はばかり」と言えても、洋式の洗浄機付き便座のある場所は「トイレ」と言いたくなることは逆に、遊びの内容が変化しても名称だけは残っていく傾向が、この「ポコペン」の方言からは推察される。一方で、「警察と泥棒」については、名称がどうであれ遊びの内容は共通している姿が浮かび上がる。たった、これら2例から言えることは多くないが、こと遊びの方言については、名称と内容とを詳細に調べていく必要があるであろう。

2.4 「いちにいさんまのしっぽ...」という数え歌

数え歌はさまざまな場面で用いられるものである。今回は、筆者の家で入浴の際に用いている「いちにいさんまのしっぽゴリラのむすめ葉っぱ腐った豆腐」という数え歌のバリエーションについて、学生個々になるべく広い地域の人に尋ねさせた。

全国にまんべんなく分布しているであろうと考えていたこの数え歌であるが、実際には、「知らない」という回答も多く、特に存在しないという回答は右図のような広範囲にわたる地域で確認された。愛知県でも名古屋や知多半島では知らないという回答も少なくなかった（灰色で塗りつぶしてある市町村は、今回の調査でデータが得られなかった箇所である）。

数え歌が存在していても、まったく違うパターンのもも少なくは見られた。代表的なものとしては、「いちじくにんじん～」と始まるものであり、今回の調査でも、岐阜市、愛知県刈谷市、岡崎市の3箇所を確認されたほか、東京、鳥取の出身者からも確認された。岐阜市の例では、「いちじくにんじんさんしょにしいたげごぼうにむぎめしななくさやつめきゅうりにとうがらしおしまい。」であったが、こちらも部分的に、「いちじくにんじんさんまのしっぽ～」と続いていたり、富山では「いちご、にんじん～」であったりなど、さまざまなパターンが観察された。

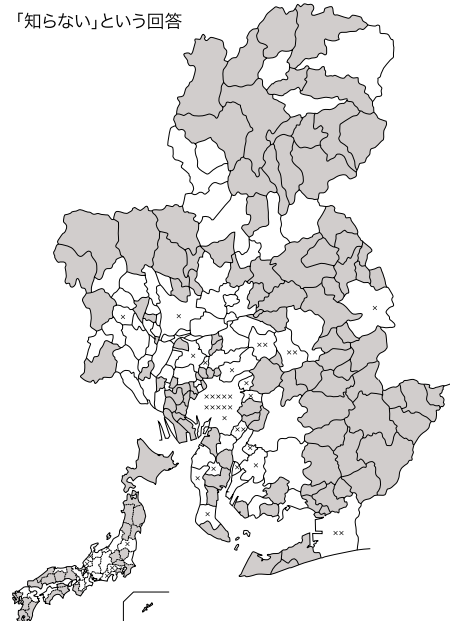
今回、予想していた「いちにいさんまのしっぽ」という数え歌に限定すると、もっとも差が大きかったのは「6」を表す部分であり、「息子」「娘」「肋骨」「ロケット」が、ある一定の広がりをもつ表現として認められる結果となった。

もっとも広く分布するのが「娘」のパターンであり、飛騨から愛知県三河西部にまで分布が広く見られる。岐阜市出身の筆者自身の記憶にある形もこれである。全国的には関東から東海をへて山陰にまで分布していることも確認される。

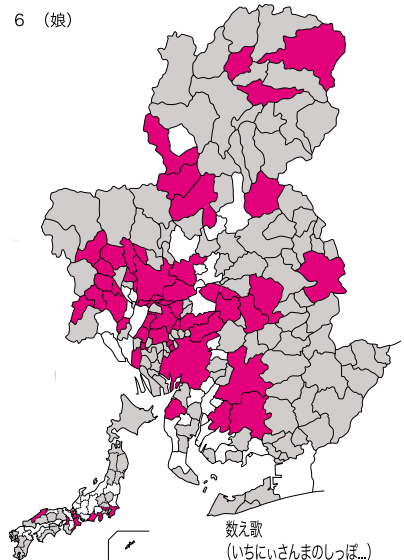
次に分布が広いのは、「息子」と「ロケット」であるが、前者は愛知県三河地方西部から東濃、さらには郡上に分布が確認されるが、後者は三河地方東部と岐阜県では西濃地方に広い分布域をもつことがわかる。「息子」と「ロケット」は相補分布とまではいかないが、おおよその棲み分けを呈する点で興味深い形式である。これらは、全国的に、「息子」が三重、奈良、大阪、石川という、西日本を中心に分布する形式である一方、「肋骨」が全国に分布する形式であるということとのつながりをもって説明することができない点でも奇異な分布をしていると言わざるを得ない。

さらに、全国的には他に例を見ず、この地域だけに分布するものとして「ロケット」の存在が挙げられる。岐阜と愛知では、名古屋から美濃加茂に連なる狭い地域での分布のみが確認されている。

これらの4つの語形の分布からわかることは何であろうか。まず

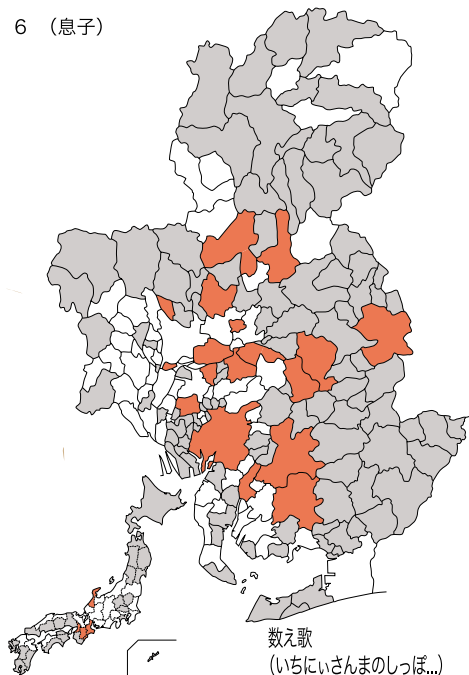


地図5-1 いちにい...不使用地区



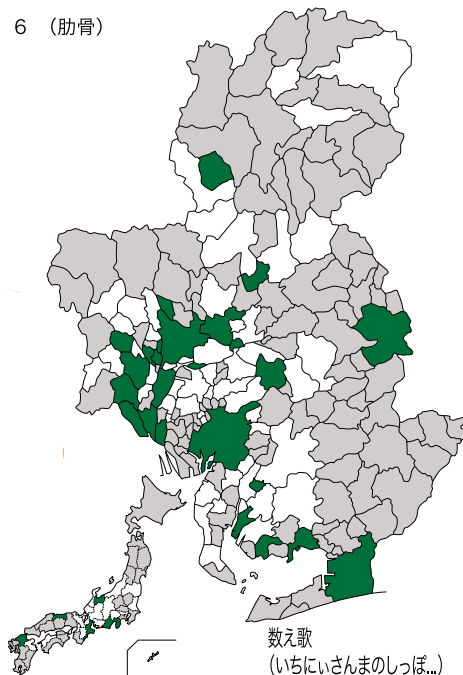
地図5-2 いちにい...ゴリラの娘

6 (息子)



地図5 3 いちにい...ゴリラの息子

6 (肋骨)



地図5 4 いちにい...ゴリラの肋骨

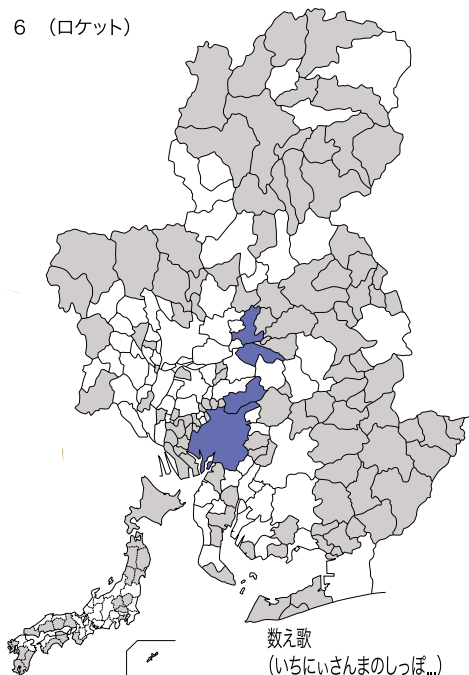
「娘」がもっとも広範囲に分布していることから考えても、もっとも「古い」言い換えれば伝統的な形式であることは、間違いなく言えるであろう。しかし、それとて子どもの遊びのことばである。この「子どもの」というところが、全国的にそれほど統一性をもつ必要のなさの原因であり、また、新たな語形を常に生み出し続けることの説明原理ともなりうるものである。であれば、この形式の用

いられる場面が重要となる。筆者自身はお風呂で時間を数えるために口ずさむしか記憶がなかったが、縄跳びで跳ぶときにも用いられるとの証言もある。縄跳びは学校で、一定数の子どもたちによっておこなわれるものであり、そのような場合、家庭だけで用いられるよりも、地域的な統一性は生じやすいであろう。

おそらくは西日本起源の「息子」と、発生地不明の「肋骨」とが、学校ごとに共有されながらバリエーションを保持していると考えるのが、このような分布の統一のなさを説明するにはちょうどよい。

今回は地図を描くには至らなかったが、少数語形として、岐阜市で「ムスキ」「ロケット」「ムギメシ」、東に接する関市で「ロツポンゲ」、名古屋市に何接する大府市で「ケツアライ」「三河地方の西尾市で「ハナクソ」という語も見られた。岐阜市、大垣市、安八町と、やや広域に分布する「ラッパ」と含め、すでに「6」を連想させる音は入っていない。このような「ゴリラの」に続くという発想から「6」とは関係なく用いられるのが、「ケツアライ」や「ハナクソ」などの語形であるが、すでに数えるという機能から離れことば遊びのみに興じるようになってしまったのかもしれない。このような有意味から無意味への変容も、子どもの遊びならではの特徵として見逃せない点である。

6 (ロケット)



地図5 5 いちにい...ゴリラのロケット

このような数え歌は、10まででひとつのまとまりを成す。実際、筆者自身も「～腐った(9)豆腐(10)」で終結するものと捉えていたが、調査をおこなってみると、その先にさまざまなパターンの連想ことば遊びが続いた。箇条書きにて挙げる。ひらがなと漢字の不統一など、記述は報告のまま。

・とうふは白い、白いはうさぎ、うさぎははねる、はねるはカエル、カエルは緑、緑はきゅうり、きゅうりは長い、長いへび、へびはこわい、こわいは幽霊、幽霊は消える、消えるは電気、電気は光る、光るはおやじのはげあたま、ピカ。(岐阜市18歳女)

- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはカエル, カエルは緑, 緑はきゅうり, きゅうりは長い, 長いはヘビ, ヘビはこわい, こわいは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま, ピッカーン。(本巣町18歳女)
- ・白い, ウサギ, はねる, カエル, 緑, キュウリ, 長い, 蛇, 恐い, ユーレイ, 消える, 電気, 光る, おやじのハゲ頭, ピカッ。(海津町18歳女)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはカエル, カエルは緑, 緑はきゅうり, きゅうりは長い, 長いはヘビ, ヘビはこわい, こわいは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま, ピカーン。(可児市19歳男)
- ・豆腐は白い, 白いは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのハゲ頭。(関市18歳女)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはカエル, カエルは緑, 緑はきゅうり, きゅうりは長い, 長いはヘビ, ヘビはこわい, こわいは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま, パッ。(美濃市18歳女)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはカエル, カエルは緑, 緑はきゅうり, きゅうりは長い, 長いはヘビ, ヘビはこわい, こわいは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま, パッ。(高鷲村18歳女)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはボール, ボールは丸い, 丸いは電気, 電気は光る, 光るはおやじのハゲ頭(白鳥町18歳女)
- ・豆腐は白い, 白いはうさぎ, ... 光はおやじのハゲ頭。(瑞浪市・多治見市18歳女)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはカエル, カエルは緑, 緑はヘビ, ヘビはこわい, こわいは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま, ピカーン。(多治見市18歳女)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはカエル, カエルはヘビ, ヘビはこわい, こわいは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま, パッ。(多治見市18歳女・19歳女)
- ・豆腐は白い, 白いはうさぎ, ウサギははねる, はねるはカエル, カエルは緑, 緑はキュウリ, キュウリは長い, 長いは煙突, 煙突は黒い, 黒いは悪魔, 悪魔は恐い, 恐いは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光はおやじのハゲ頭(下呂市18歳性別不詳)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはカエル... (高山市19歳男)
- ・とうふは白い, 白いは~, ~は光る, 光るは親父のハゲ頭(飛騨市18歳女)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはカエル, カエルは緑, 緑は揺れる, 揺れるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま。(愛知県一宮市18歳女)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはバツタ, バツタは緑, 緑はヘビ, ヘビはこわい, こわいは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま。(愛知県一宮市18歳男)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはカエル, カエルはみどり, みどりははっぱ, はっぱはゆれる, ゆれるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま。(愛知県一宮市19歳女)
- ・豆腐は白い, 白いはうさぎ, ウサギははねる, はねるはカエル, カエルは緑, 緑はキュウリ, キュウリは長い, 長いは階段, 階段は恐い, 恐いは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光はおやじのハゲ頭, ピッカッ。(愛知県江南市19歳女)
- ・とうふは白い, 白いはうさぎ, うさぎははねる, はねるはバツタ, バツタは緑, 緑はヘビ, ヘビはこわい, こわいは幽霊, 幽霊は消える, 消えるは電気, 電気は光る, 光るはおやじのはげあたま。(愛知県祖父江町(現稲沢市)20歳女)
- ・豆腐は白い, . . . 光るはオヤジのはげあたま(愛知県安城市18歳女)

さて、このようなことば遊びに地域・性別による偏りは見られるのであろうか。また、偏りがあるとすれば、それは何を示すのであろうか。

まず、愛知県ではこのような続きが少ない。これは、そもそも、前の「いちにい～」という数え歌自体がないことによる。また、性別を見ていくと、圧倒的に女子の使用が多い。やはり、縄跳びとの関連で考えるべきであろう。

内容について見ていくと、「腐った豆腐」の「豆腐」を受けて「白い」「うさぎ」「はねる」と行くところまでは共通しているが、その後、広くは「カエル」に繋がる一方、一宮市と稲沢市では「バツタ」となっているという共通点をもつ。その後も、「幽霊」が多くこのところで登場するが、最後は決まって「光るはおやじのハゲ頭」である(その後、「ピカ」類が続くことが多い)。

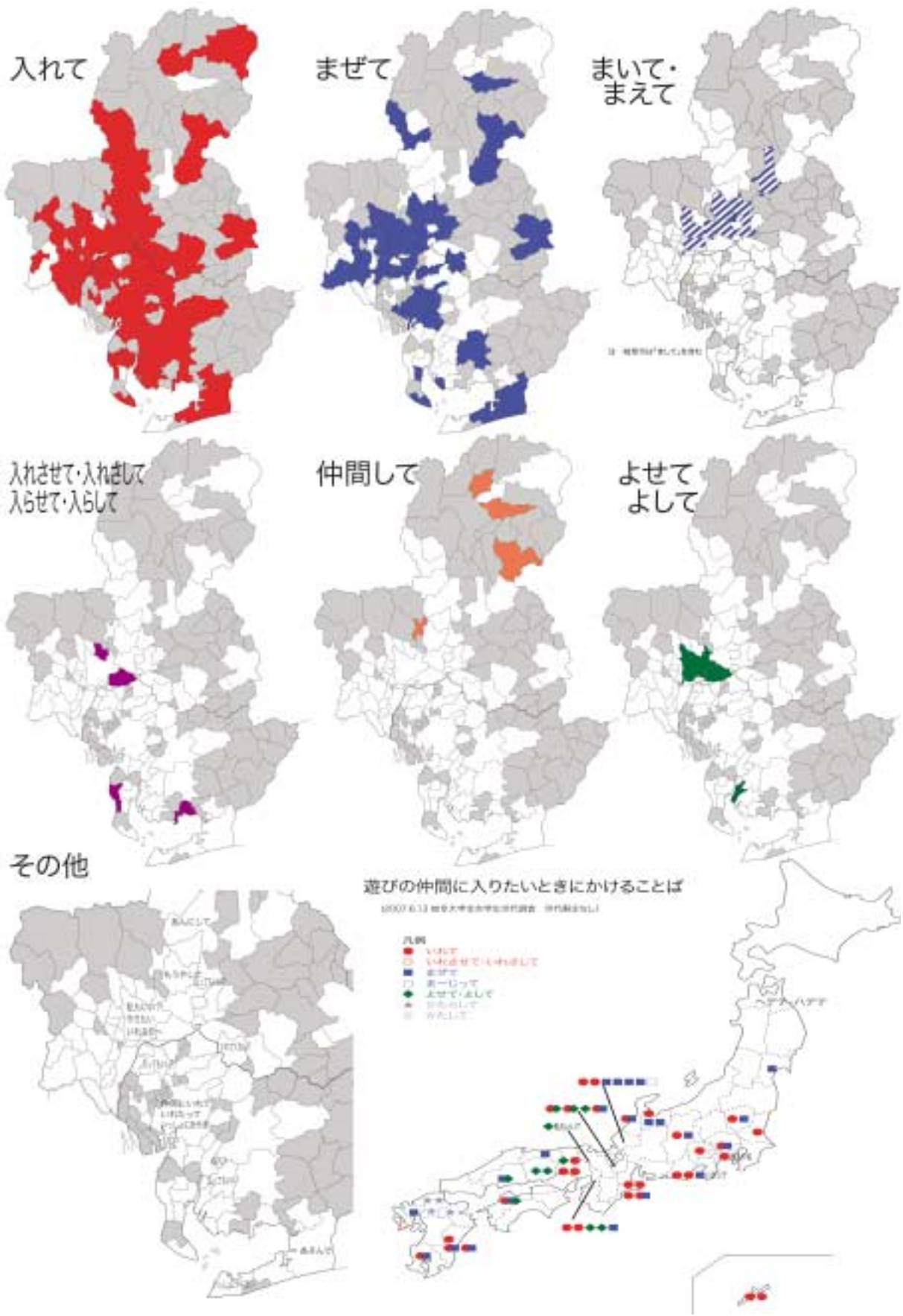
遊び自体の中で用いられることばについては23節で見たポコペンもそうであるが、守られるべき定式と自由な変形という両面性を呈する。「豆腐は」で始まり「光るはおやじのはげあたま」で終わる部分を変えてはいけないう定型枠のようなものであり、すべての回答者に共通していたが、その間は地域や、あるいは個人によってさまざまであった。ここまで変えたら変だという一定の基準が子どもたちにもあるのであろう。

2.5 「仲間に入れて」というときの言いかた

地域的な偏りがありながら、ひとつの語形のみを用いるのではなく複数の語形を同時に用いるために、その分布がはっきりしない方言語形がある。代表的なものとしては、尊敬語の形式もそのひとつであると考えられるが、「仲間に入れて」というときの言いかたも、分布がはっきり現れたというよりは併用の扱いに苦慮した語形であった。

このような表現の場合、それをどのように表すかは大きな問題であり、たとえば、ひとつの語形だけを聞いたとしても、それは必ずしもその地域で用いられている語形の実態を正しく反映しているとは言い難い。今回は、併用回答が多かったこともあり、その併用語形も含め、その回答の見られた地点を市町村単位で塗りつぶして示すことにする。薄い灰色で塗りつぶしてある箇所は回答が得られなかった箇所である。このような地図には、併用語形が多くとも語形の分布がおおざっぱに掴みやすいというメリットがある反面、どのような併用具合であるのかがわかりにくいというデメリットもある。また、学生が調査してきたデータによるため、インフォーマントの出身地を細かく特定できないことも、この調査自体の限界でもある。そのような功罪を含みおいた上でご覧いただきたい。

なお、原稿はカラーで作成してあるが、印刷されたものは白黒の予定である。pdf版などを参照していただければ、詳細が掴みやすくなる。



地図6 仲間に入れて

全国分布を見ても、岐阜・愛知での分布を見ても、「入れて」がもっとも広く分布している。一方、「ま

ぜて」も、近畿地方には少ないものの、やはり全国に分布していると言ってよい。すなわち、どちらも方言というわけではなく、かといって、これだけが共通語であるとも言えない状況である。なお、福井では「まーじって」という語形も観察されている。

地域限定の語として、全国では、「加担する」に由来すると一般には考えられている、九州の「かたらし」と山梨に「かたして」が見られる。また、近畿地方に多く、中国地方にも見られる「よせて・よして」は、今回の調査において岐阜・愛知では、わずかに岐阜市と各務原市、および愛知県碧南市で確認されたのみであった。使役を含む語形は、全国では長崎県諫早市の「いれさして」が一件と九州の「かたらせて」が確認されたが、当地方では、岐阜県の山県市高富および各務原市にて「いれさして・いれさせて」が、愛知県の常滑市および蒲郡市で「はいらして・はいらせて」が見られた。これだけのデータで考えるのは危険であるが、「～させて(もらう)」という謙遜表現が西日本的であることが事実であるとすれば、当地方は遊びことばにおいても西日本の東端の一面を呈していると言えよう。

なお、名古屋市では一件「いれたって」という形も採取された。「いれたって」は「入れてやって」である。この「てやる」は他者への恩恵付与ではなく話者自身が恩恵を被るもので、共通語でも確認される用法である。また、命令形を用いた「いれろや～」が岐阜市で、依頼の形の「いれてくれん？」が多治見市で用いられているほか、関市武儀町と一宮市、愛知県安城市では「入ってもいい？」と許可願いの形も見られた。これらはいずれも話者自身の利益になることを働きかけるモダリティ形式を用いている点で共通するが、一方で、渥美半島の先端にある田原市渥美地区では「いっしょにやらまい」と勧誘形を用いていることも注意を要する点である。

岐阜での限定された語形としては、まず、中濃に分布する「まいて・まえて」という言い方が挙げられる。「まいて・まえて」については、おおよそ分布域が「まぜて」に重なることから、「まぜて」の語中の摩擦音が脱落し「まえて」となり、さらに、「入れる」を「えれる」と前舌母音の混同が見られる地域だけに、「まいて」となったものと考えられる。

なお、岐阜市では一件「まして」という語形が採取された。市内の、比較的人口の集中する地区の小学校出身者からの回答であり、回答者本人は、「増して」ではないかという語源意識をもっていた。たしかにアクセントも平板型である点で「増して」の可能性も否めないが、他に「増す」という語を含む表現が一件も確認されなかったことには注意を要する。むしろ、分布から見ても「まぜて」(これも、当地のアクセントで言えば平板型)と「よして」との混交形である可能性のほうが高いと考えられる。

より地域が限定された語形としては、飛騨と関市洞戸地区に「なかまして」が、また、郡上市に「あにして・あんにして」という言い方が見られた。「なかまして」は「仲間して」であるが、「あにして・あんにして」については、地元の老年層のかたに伺っても語源までは定かにはならなかった。美濃市で用いられている「もうやして」は、「催合」に由来することばで、この地域では「もうやいこ・もうやっこ」などの形で「共同で」を意味することばである。わずかに「共同で」という語源の意識があって用いているかという語形である。山梨の「かたして」についても、やはり地元では語源意識なく使っているとの証言も得られており、子どもの遊びことばに限ったことではないかもしれないが、意味を考えるよりも皆が使っているから考えずに使うという性質が、子どものことばにはより強く表れている一例である可能性もある。

この「仲間に入れて」に関する諸表現は、確かに「あにして・あんにして」など語源がわからないものであれば、聞いて奇異に思うことも当然あるであろうが、「入れて」と言われても「まぜて」と言われても、意味が通じる点では大差ない。一方で、語源意識なく使っている慣習表現を用いながら、一方で、特に定式化されていないふつうのことばを用いているという矛盾が、まさに子どもの遊びの正直な特徴なのかもしれない。

2.6 「ケッタ」と「チャリ」

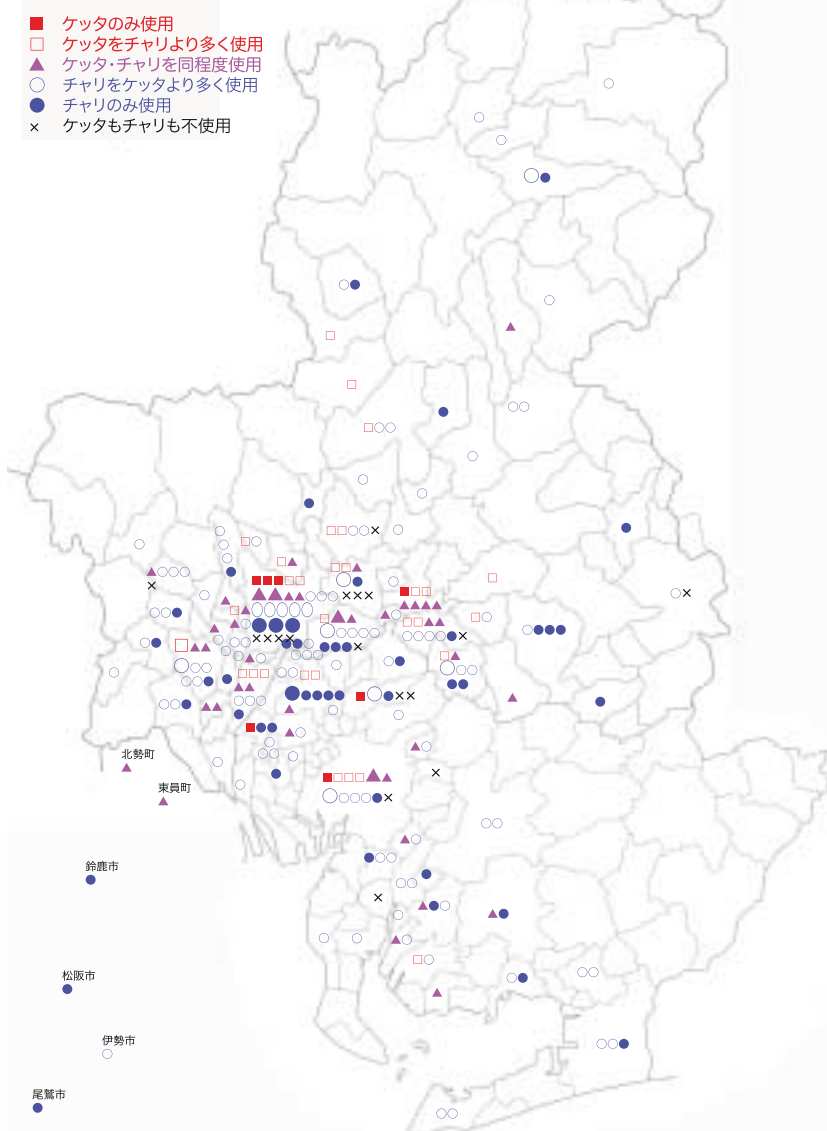
東海地方で特に用いられると考えられている「ケッタ」についての考察は、すでに何点が見られる。

岸江信介他編(2001)では、名古屋から伊勢の間でさまざまな語形をどのように表現するかが調査されており、その第1番目の項目に「自転車」が挙げられている。それによると、「ケッタ」は、名古屋や四日

自転車

(2007.6.6 岐阜大学全共, 6.12教育学部(小)教科国語 学生世代調査)

- ケッタのみ使用
- ケッタをチャリより多く使用
- ▲ ケッタ・チャリを同程度使用
- チャリをケッタより多く使用
- チャリのみ使用
- x ケッタもチャリも不使用



地図7 自転車の呼び名

市で60代の使用が認められる、すでにある一定の歳月の使用を経た表現である。一方、三重県中部の津市や松阪市では30代までの使用が認められ、伊勢市には、この調査では確認されなかったという。三重県中部で、「ケッタ」の代わりに用いられるのは、なんといっても「チャリンコ」や「チャリ」であり、相対的に古い「チャリンコ」は、津市近郊の香良洲町では70代からも回答が得られている反面、「チャリ」はおもに20代以下によって用いられ、すでに名古屋でも用いられているという結果が表されている。

今回、このような自転車の呼び名に関して、名古屋でも「ケッタ」と「チャリ」の併用化が進んでいることを受け、現在の大学生が、どのように自転車を呼んでいるかを、岐阜と愛知に関し、面談で調査した結果を示す。

この調査は、学生が、他の同世代の人に、自転車をどのように呼ぶか調査してきたものであり、出身地は、市町村単位でしか聞いてない。また、被調査者の性別については、調査項目に

含めてあったが、徹底されておらず性別不詳のままのデータもあったため、今回の地図には反映させていない。なお、大記号は5件分のデータである。

地図から全体として読み取れることは、すでに「チャリ」が大半の地域で優勢であることである。

たとえば名古屋市においては、「ケッタ」のみを用いるのが1名、「チャリ」も用いるが「ケッタ」が多いのが3名、どちらも同程度用いるのが6名、「チャリ」が多いとの回答が8名、「チャリ」のみという回答が1名からあった。「ケッタ」のみを用いるとの回答を5点、「チャリ」のみを用いるとの回答を1点として計算すると（両形とも不使用を除く）、平均は2.7点で、やはり拮抗した場合に期待される値である3点よりも低く、「チャリ」の優勢さが数値としても確かめられる。

岐阜市は「ケッタ」のみを用いるのが3名、「チャリ」も用いるが「ケッタ」が多いのが2名、どちらも同程度用いるのが12名、「チャリ」が多いとの回答が30名、「チャリ」のみという回答が15名で、平均値は1.6とさらに低い。ある程度の人数がなければ平均値をとっても無意味であるが、愛知県稲沢市（回答数10）で1.2点、一宮市（回答数20, 1名不使用）で2.2点と平均を下回った一方、岐阜県では、可児市（回答数10, 1名不使用）で2.5、各務原市（回答数20, 1名不使用）で2.3点、西濃の大垣市で2.6点と、愛知県よりは全体として高い値を示した。特に、美濃加茂市（回答数7）では3.6点と「ケッタ」が優勢である。

もちろん、このような「平均値」には、男女比が一定でないという大きな問題点がある。実際に次のよ

うな証言が得られている(意見は回答そのままではなく要約)。

- ・男がケッタという気がする。(岐阜市・女)
- ・ケッタは悪ぶった感じで男子が使う。(各務原市・女)
- ・ケッタはなんかチャリより男ことばっぽい。チャリもちょっと男言葉な感じがするので、両方あまり使わない。(関市上之保・女)
- ・ケッタはおじさんが使う。あるいは男子がよく使う。(名古屋市・女)

「ケッタ」の語源として有力であるのは「蹴りたくる」ことから来たというものである⁴が、このような荒々しさが、男が使う語としてのイメージに繋がっているものと考えられる。

また、このような性差イメージは、自転車の形状に関するイメージにもつながる。

- ・婦人用自転車のときはケッタと言わない。(羽島市・男)
- ・ケッタはハンドルがまっすぐ。他のはチャリ(関ヶ原町・男)
- ・ケッタはハンドルが横にまっすぐ、チャリはママチャリみたい。(八幡町・男)
- ・ケッタは出前用のようなゴツイ感じのやつ。(長野県下諏訪町・男)
- ・物理的には同じだが、ケッタは足代わりっぽく、チャリは自転車そのもの(各務原市・女)

さらには、「ケッタ」と「チャリ」の総合的なイメージにも差が見られた。ただし、「ケッタ」に相対的なプラスイメージをもつ意見は少数で、逆に「チャリ」にプラスイメージをもつ意見が多く見られた。

- ・中学ではケッタかっこいい、チャリださい。でも、高校はほとんどチャリ(美濃加茂市・女)
- ・ふざけた(雑な、男っぽい)会話でケッタ、かしこまるとチャリ。(関市・女)
- ・ないけど、チャリのほうがなんとなくかっこいい。(垂井町・男)
- ・ケッタは古いとか昔のことばって感じがする。(関市・女)
- ・ケッタは語源が解らないので違和感を感じる。チャリも良くわからないけど。(岐阜市・男)
- ・ケッタ、ケッタマシンは無理している、汚い感じ(関市上之保・女)
- ・ケッタのほうがやや田舎臭い。(愛知県吉良町・女)
- ・ない。私的にはケッタというとおんぼろチャリというイメージ。(愛知県小牧市・女)
- ・ないけど、チャリのほうがなんとなくかっこいい。(垂井町・男)
- ・ケッタという時は少し格好つけたり悪ぶってみたい気分の時。ケッタというのは恥ずかしく、チャリと言う方が気が楽。(愛知県豊明市・女)

単に語感の違いとして捉えている意見も見られた。

- ・チャリのほうがいいやすい。友だちもチャリが多い。(愛知県・田原市渥美・男)
- ・チャリのほうが言いやすいが同じ。(岐阜市・女)
- ・いいやすさでチャリ(愛知県大府市・男)
- ・チャリのほうがちょっとかわいい気がする(名古屋市・女)

このようなイメージからのことばの選択に加え、回答者自身の成長過程において使用語が変化したとの証言も多数得られた。

- ・ケッタは中学の校区内でよく使った。チャリは高校でもよく使った。(岐阜市・男)
- ・小学校でケッタ、今はチャリ(名古屋市・男)
- ・中学ではケッタ、高校からチャリ(愛知県碧南市・女)
- ・中学までケッタ、高校からチャリ。原付をケッタマシンといていた。(愛知県美和町・女)
- ・チャリは小さい頃から、ケッタは中学で友だちから(大垣市・女)
- ・小さい頃ケッタ、高校からチャリ(愛知県佐織町・女)
- ・地元の友だちとはケッタ、地元が違う高校の友だちにはなんとなくケッタを使うのが恥ずかしいのでチャリを使う。(名古屋市・女)

4) 2007年7月の郡上市での調査では、「下駄」の代わりに用いることから「ケッタ」と言ったとの証言も、老年層男性から得られた。

多くは、小学校という狭い範囲での生活圏を有していた時期に「ケッタ」を用いていたが、高校になり広域の友人関係をもつようになってから「チャリ」を使うようになったというものであった。反対に、高校で「ケッタ」を使用したという意見は、次の1件のみ得られた。

- ・高校であった友だちはケッタという人が多かったが、小中学校の頃の友だちはみんなチャリと言っていた。(愛知県知立市・男)

興味深いのは、これらの多くが愛知県でのイメージである点である。岐阜県内でも岐阜市と大垣市という比較的都市部においてこのような傾向が見られたのは、示唆に富む。遊びのことばと異なり、自転車は社会性のある乗物であり、やはり生活圏の違いがことばに反映する点を見逃してはならない。

また、このような個人の言語生活における変化は、必ずしも世代的な変化とは一致しない。

- ・ケッタのほうが古いイメージがある。(愛知県佐織町・女)
- ・ケッタは古くさいイメージがあり、チャリは現代的なイメージがある。(岐阜市・男)
- ・ケッタは中年の人が言っていたのを聞いたことがある。(愛知県豊橋市・女)
- ・ない。中高はチャリ。ケッタは年配や親世代。(輪之内町・女)
- ・ケッタは母が昔使っていたことがあったけれど、今はふざけているときにしか使わない。(愛知県豊橋市・女)
- ・ケッタは木でできた古い感じ。(岐阜市・女)

今回の地図を含め、一般の方言調査の結果は、その人の過去の言語生活を線で捉えてまでは表現できていないという欠点をもつ。今回多数寄せられたイメージを含んだ結果を十分に表す調査方法と結果の提示方法を今後考えていかなければならない。

そのほか、次のような意見もあった。

- ・ケッタは方言意識から他県出身者の前で使ってみることが多い。(愛知県尾張旭市・女)
- ・ケッタは愛知県っばい(名古屋市・男)
- ・ケッタは気軽にかけける感じ(羽島市・女)

このような違いを述べる意見が見られる一方で、それよりも多い回答数(岐阜と愛知の出身者に限定しても50件以上)で、違いがないとの意見が得られた。

- ・ない。気分で。(愛知県愛西市立田・女)
- ・特にない。ケッタは通じない場合が多いのでチャリを使う。(愛知県刈谷市・男)

ことばは、その人の生活するスタイルとともに変容する。若い世代に用いられる方言語形は、昔のような地域的な限定が生じやすい社会とは異なり、このような生活スタイルの変容がもたらされやすい環境に置かれている。「ケッタ」と「チャリ」は、そのひとつの事例として興味深い示唆を与える可能性を秘めている。今後も継続した調査をおこなわなければならない。

3. 学校の諸事物を指し示すことば

学校という世界は、その中で一日の大半を過ごす子どもたちにとっては大きな世界である。新たな知識を得て技能を磨くのみならず、人間関係をも学んでいく場として大きな存在となっている。

このような大きな影響力をもつ学校で用いられることばにはどのような特徴があり、それらがその構成者たる教員と子ども双方にとってどのような意味をもつものとなっているのであろうか。

たとえば、今回は取り上げないが、共通語でいわゆる「模造紙」と呼ばれるB全紙大の白い紙は、岐阜と愛知においては「B紙(ビーシ)」と呼ばれる。語源もはっきりしている上に、アルファベットまで入っているこのことばを、当地の人間は全国共通語であると疑いもしない⁵⁾が、れっきとした地域限定のことばである。これらが、なぜ「B紙」と呼ばれるのか。それは、学校でそう教わっているからに相違ない。掲示物を貼る場合であっても、調査報告をプレゼンする場合であっても、先生は「B紙」に書くように指示をする。

「B紙」を学校外で用いることがほとんどないことも特徴的である。もちろん、夏休みの一研究を発表

するために店にいった「B紙」をくれと言うことはあるが、限定された場面で用いられるのみである。県外に良質の模造紙を買いに行くような必然性もない。

学校という要因が大きな語には、どのような特徴があるのであろうか。今回、このような点を調べるために、小中学校で、特に二時間目と三時間目の間に取られる比較的長い休み時間をどう呼ぶか、学級内でおこなわれるさまざまな学習活動あるいはそれに伴う教材等がどのように呼ばれているか、学校内の施設や用具がどう呼ばれているかについて調査をおこなった。

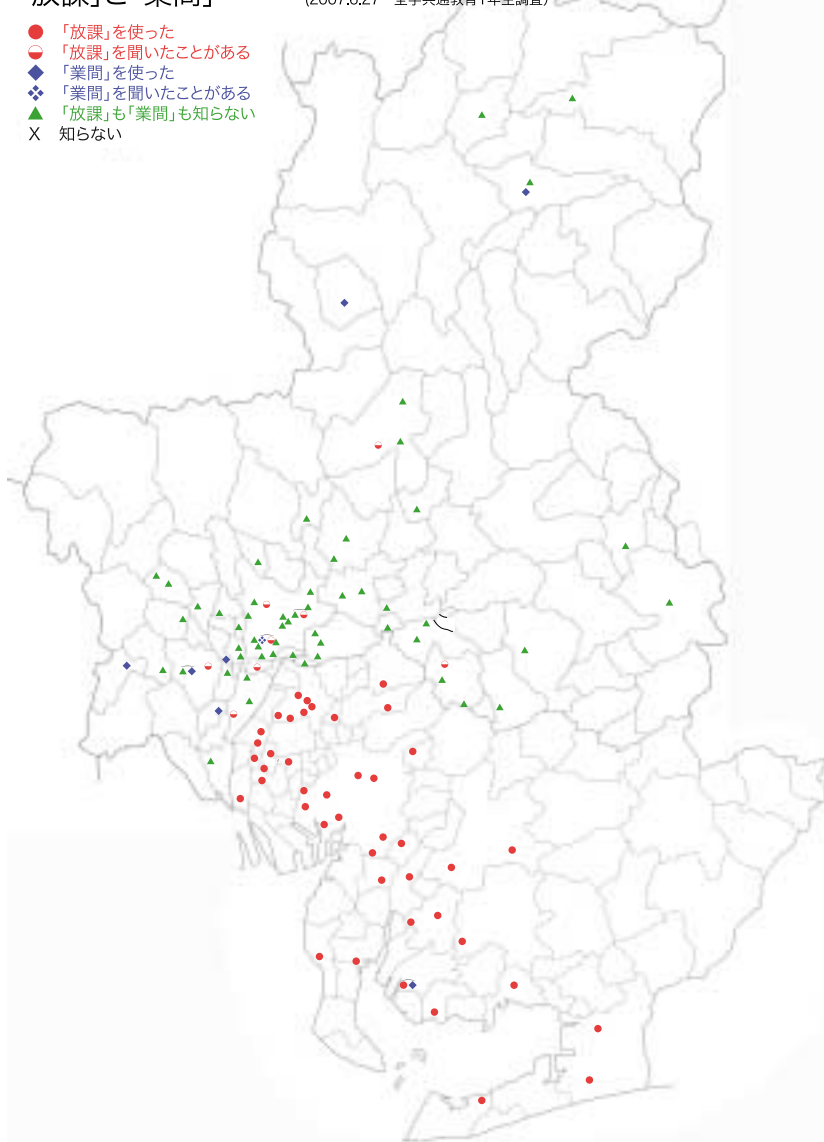
3.1 学校の休み時間の呼びかた

愛知県で学校の休み時間を「放課」ということはよく知られたことである。今回、「放課」について、

「放課」と「業間」

(2007.6.27 全学共通教育1年生調査)

- 「放課」を使った
- 「放課」を聞いたことがある
- ◆ 「業間」を使った
- ◇ 「業間」を聞いたことがある
- ▲ 「放課」も「業間」も知らない
- X 知らない



地図8 「休み時間」の呼び方

らであり、また県境によって区切られることがない。

この「放課」については、佐藤仁志(2007)において、より詳細な報告がおこなわれている。佐藤は、単なる「放課」だけでなく、小学校などの2・3時間目の間の長い休みのことをどのようにいうかを調査

使用する、聞いたことがある、聞いたことがないの3段階で、また、同じように「業間」ということばも調べてみた。

結果は以下に示したとおりであるが、で示したところが「放課」を使ったことがある小学校の所在地であり、が「業間」を使ったことがあるところである。いずれの語形も「知らない」という回答の場所にはが示してある。

この地図からもよくわかるように、「放課」は愛知県のことばであり、岐阜県では通じない。また、全国の他の地域の出身者から得たデータにも、「放課」を使う地域は見られない。

一方、「業間」は、高山市や高鷲村、巣南町(現瑞穂市)、輪之内町、大垣市、関ヶ原町、愛知県碧南市で用いられていることが確認される。まったく廃れてしまった語形というわけではないようである。

「放課」と「業間」では分布に大きな違いがある。「放課」は完全に愛知県のことばとして、使用域が県域と一致するのに対し、「業間」は分布もまば

5) 今回、「B紙」についても調査をおこない、本節で示すデータと同じ質のものを確保したが、岐阜県と愛知県とでは、全域で使用されているとの状況であったため、地図を描くことはしなかった。

し、「中間放課」「大放課」「～分放課」「長放課」「放課」の分布を調べている。それによると、名古屋市を中心に知多地域北部にかけて「大放課」が分布し、その周辺に「～分放課」が分布するという。また、「中間放課」という言い方は、これもやはり一宮市と、現在は一宮市に編入されている旧木曾川町に確認される特徴のある表現であるとする。さらに「長放課」と「放課」は尾張地方北部と三河地方西部に点在していることも報告している。

また、いわゆる「昼休み」についても、県内広く「昼放課」が分布する一方、相対的には「昼休み」ということばが多くなっていることも佐藤（2007）は報告している。特に、尾張地方北部の木曾川沿いについては、岐阜県からの「昼休み」ということばの流入の可能性があること、名古屋市では都市部における方言の廃れ（山田：むしろ共通語化と言ってもよいかもしれない）の可能性があることを示唆した点でも評価できる。

さらに、佐藤（2007）は、「放課後」の言い方にも着目し、岐阜県では「放課後」が極めて優勢であるのに対し、愛知県では、「放課後」は見られるが半数以下で、代わりに「授業後」や「業後」、「学校が終わった後」などの言い方が多く見られることも報告している。「放課」と「放課後」という、まったくの同音異義語ではないが、やはり紛らわしさを回避するための工夫であると考えられる。

「放課」とは、その名称どおり、課業から放たれることである。「放課後」とは、まさにすべての課業からの解放の後の時間であり、この場合、「放課」は変化の瞬間を指すものとして用いられている。一方、愛知県で用いられている「休み時間」を意味する「放課」は、「放課されている持続的狀態」を指している。言い換えれば「放課中」ということである。

このようなことばは、変化の結果が持続する意味をもつ漢語名詞にはよくあることである。「閉鎖」といえば、扉などが閉まることを一義的には意味する（「門扉閉鎖の際、ほかの教師が危険防止のため門の前に待機していることは期待できず、…」）。「同高校の校門指導における門扉閉鎖については、指導に当たる教師の作業分担の規定、申し合わせや慣行はなかった。」中日新聞1993年2月10日「校門圧死事故の判決」に関するニュース。しかし、「先月末、若者の犯罪抑止に関する学内の行事にブッシュ大統領夫妻が来訪。警備のための食堂閉鎖だった」（中日新聞2005年11月11日）や「このまま（筆者注：伊吹山ドライブウェイの）閉鎖が長引くようなら、レスト関ヶ原では料理などをセールスポイントとして、PR戦略を考え直す必要があります」（中日新聞1995年5月15日岐阜総合面）のような場合に用いられている「閉鎖」は、持続中の状態を表している。このような日本語の変化結果の持続を含意する漢語名詞である「放課」も、同様の解釈の両義性を有しており、愛知県では後者の意味を用いたものであると考えられる。

なお、佐藤（2007）では、岐阜県関市の安桜（あさくら）小学校において、「放課後」を「放課時間」と呼ぶとの報告がなされている。これは、愛知県の「休み時間」を指す「放課」と同じ発想であるが、愛知県では、個々の課業からの解放に対して「放課」を用いるのに対し、安桜小ではすべての課業からの解放に対して用いている点が異なっている。

「放課」の使用は、完全に県単位のものであり、県境を越えて他の地域に及ぶものとはなっていない。これは、次に見る学習活動に対する名称とは異なる様相を呈するものである。この点をより細かく見るために次節以降、学習活動の名称を2点見ていくこととする。

3.2 「一号車」

教室で用いることばは、極端に言えば、その教室で通じればよいというものである。それは極端であるにしても、学校の枠を超えて通用しなければならない積極的な理由がないものもある。当然、語彙は有限であり、そのために同一の語を学校の枠を超えて用いることはあるであろうが、そのように受け入れられるかは、教育上の必要性があってこそである。

「一号車」とは、教室の中で、8つのグループがあったとすると、その2つずつをまとめて列ごとに4つに分ける際に用いられることばである。グループでは小さすぎておこなえないが教室全体でおこなうには大きすぎる、たとえば、国語の物語教材の動作化などをおこなう際に用いられるものである。

このような単位での活動が必ずしも教室でいつもおこなわれるのかは、詳細な調査をおこなったわけではないが、岐阜市内などの研究授業などではよくおこなわれている。すなわち、「一号車」と呼ぶことのメリットはないわけではないのである。

今回は、この「一号車」ということばを使ったことがあるか、使ったことはないが聞いたことはあるか、それとも知らないかという3つの選択肢から選んでもらう方法で調査をおこなった。

調査結果からは次の様相が見て取れる。



地図9 列を基本とした学習単位

して興味深い分布を呈するものとなっている。このことは、やはり、学校教育が県単位でおこなわれていることのひとつの証左である。

なお、「一号車」以外の言い方としては、「列」が多く見られた。ただし「列」は2人ずつ横に並んでいくうちの1人の後ろに並ぶ数人を指す場合と紛らわしく、やはり「一号車」と同じではない。また、少数語形としては、「縦わり班」が高山市と羽島市で確認されたほか、岐阜市北部の中学生からは「僕のクラスは一号車だけど、隣のクラスは一丁目」のような、学校内での違いを示唆する意見も得られた。教師の学習活動に対する工夫が見られることばとして興味深い事例である。

まず、「一号車」という言い方は岐阜県でも、特に岐阜市を中心とした地域と、少し離れて東濃西部の多治見、土岐、瑞浪において用いられているということである。しかしながら、隣接する旧日本巣郡では、旧巣南町を除いて用いられていないことも気にかかる。教育委員会単位で用いるか否かが偏っているということであろう。

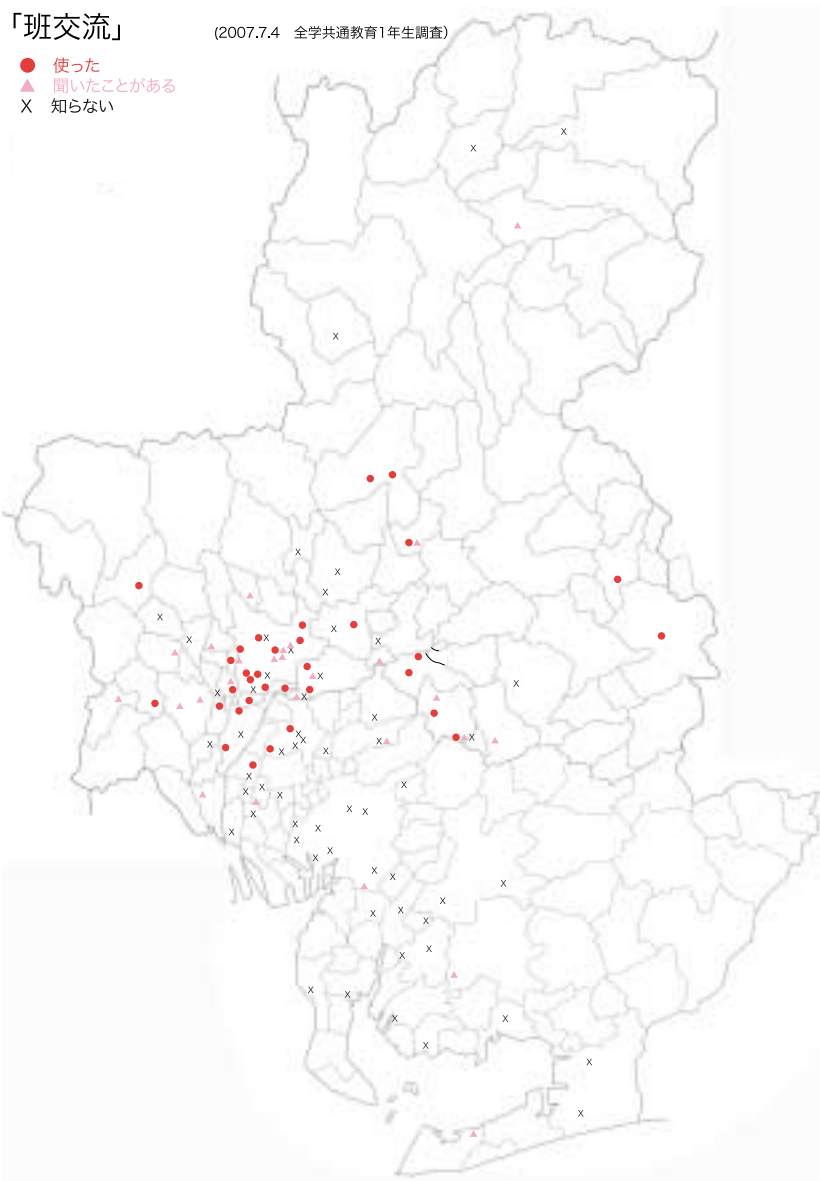
一方で、当然、「一号車」という人数を作れるのは、1クラス30名程度の人数が必要である。そのような人数に達しない小規模校においてはそのような用語が存在するはずもない。周辺部の小学校においてxが多いのは、このような規模のためである。実際に「一号車」ということばがことばとして存在する条件を満たしていないことと、ことばが存在しないということが選択されたこととは同じではない。

このような学校規模による制限はあるものの、このようなことばが岐阜県に限定されて用いられている、言い換えれば、愛知県の「放課」とは逆の現象と

3.3 「班交流」

教室での重要な活動のひとつに、班（グループ）内で意見を自由に言い合い確認する作業がある。

討論形態としてはバズセッションに類似した側面をもつが、人数、時間、順序については、教室の実態に合わせておこなわれるものである。



地図10 班単位での意見交換

この討論形態は、岐阜県では特に「班交流」ということばで表現される。今回の調査では、それが、やはり岐阜県で特によく用いられていることばであることが確認された。ただし、前節で見た「一号車」とは異なり、県境を越えて愛知県一宮市や祖父江町（現稲沢市）にも分布が確認される点では、異なる。

これには、教員の交流がある地域であることが関与する。岐阜県では研究校が、特に、岐阜市に多くあり、そこへ来た教員が、授業運営に関する便利な用語として県境を越えて持ち帰ったことによって広まったことが考えられる。岐阜市内をはじめ県内の研究校の研究会へは愛知県尾張地方からの来校者も少なくない。このような県境を越えた交流が、このようなことばの分布を生じさせているものと考えるのが妥当であろう。なお、県外の学生からは、熊本出身者が使用したとの回答を寄せ、静岡県と宮崎県出身者が聞いたことがあるとの回答をしているが、いずれも少数の意見であり確認は取れていない。

一方、岐阜市内でも×が散見されることにも注意しなければならない。これらの学校で同様の活動をどのように表現しているかは、今回の調査には含めなかったため詳細なデータは得られていないが、単に教室で児童・生徒に活動内容を伝えるのであれば、「班・グループで話し合っ」と言えばよいことである。それをあえて専門用語的な「班交流」と言うのは、研究校の教師主導による用語であるとの印象を受ける。

そもそも、「交流」ということばが、当該の活動を指す適切な用語であるかは考える必要がある。『岩波国語辞典第六版』には、「違った系統のものが、互いに行きかい、入りまじること。「文化」「人事」とある。『日本国語大辞典』においても、やはり異なる所属をもつ「人」が行き来することに対して用いるとの、同様の記述が見られる。すなわち、共通語において「意見」は「交流」するものとは、この記述からは言い難く、言うなれば「交換」することのほうが正しいのであろう。

では、この「交流」がどのように用いられているかといえば、中日新聞の記事データベースで「意見交流」を検索すると、「観光地賑わい再生意見交流会 in 加賀（加賀市）」(中日新聞福井版2007年8月8日)、

「事例発表の後、十人ほどのグループに分かれて今後の取り組みについて意見交流。」(中日新聞飛騨総合2007年6月1日)など、過去1年間に12件の記事がヒットする。2番目の記事では、リードには「教員ら意見交換」としながら、本文では「意見交流」ということばを用いているように、同じ記事の中でも揺れが見られる。一方、朝日新聞のデータベース閲覧では、大阪で3件のほか、富山、兵庫、岡山の記事でそれぞれ1件ずつ、過去1年間で6件の記事がヒットした反面、全国記事としてはふつう使われない表現であることが確かめられた。一方、中日新聞系の東京新聞の記事データベースでも、過去1年間に1件も見あらず、過去10年さかのぼっても7件しか出てこない(中日新聞では93件)など、地域差が見られる結果となった。

今回は全国にわたる詳細なデータを取れていないが、やはり「意見を交流する」というつながりは地域性をもった連語であると考えられる。愛知県と岐阜県との差については、「意見交流」という検索語によってヒットした93件の記事の内、やはり岐阜県が38件と最多であり、愛知県の10件、三重県の10件、滋賀県の7件、長野県の5件、福井県の2件と比較しても群を抜いて多いという結果になった(残りは、特定の地域向け以外の記事)。

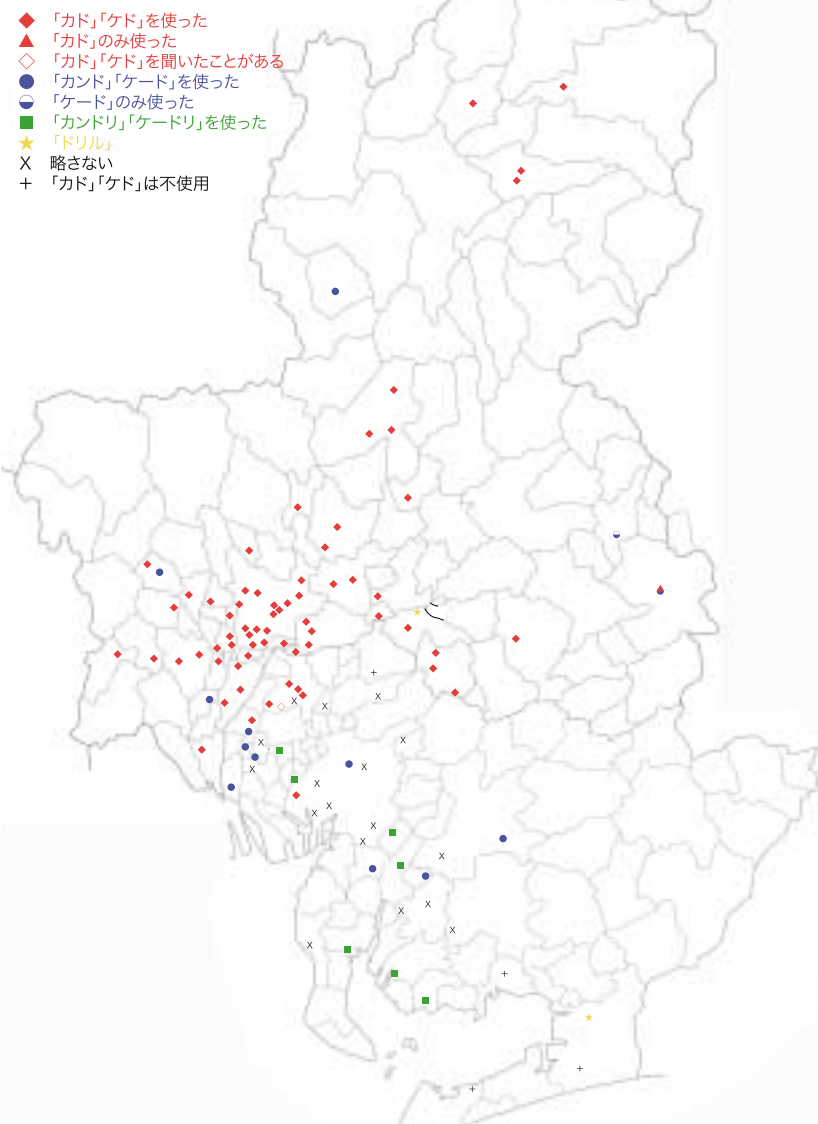
「班交流」ということばは、新聞記事になることはなく、いずれの新聞データベースにおいても0件であったが、このように岐阜県内の学校で用いられている「班交流」ということばには、「交流」が「意見」に対しても用いられるという、方言的な連語の結びつきがあつてのことであると考えられる。たしかに共通語から見れば、班で意見が交わされることは、「交流」ではなく「交換」であろうが、西日本で多く用いられている「意見交流」という結びつきや、学校外で班単位での意見交換をおこなう機会もないことを考えると、あえて共通語に合わせる必要があるかということも考えなければならない。

3.4 「漢字ドリル」と「計算ドリル」の略称

「漢字ドリル」や「計算ドリル」と言えば、小学生が日々、宿題として課され、繰り返し繰り返し親にもチェックの役割が回ってくるものである。学校では予定を書く黒板に宿題のページが書かれ、子どもたちもそれを連絡帳に写して家に持って帰る。その連絡帳には、岐阜市の事例でいえば、おおよそ例外なく「カド・ケド」と書かれている。すでに、このような「漢字ドリル」と「計算ドリル」の略語については、山田敏弘(2004)においておおまかに報告をおこなってきたが、今回、小学校ごとに地図を描くことができたので、その結果を示す。

「漢字ドリル」と「計算ドリル」

(2007.6.27 全学共通教育1年生調査)



地図11 「漢字ドリル」と「計算ドリル」の略称

前稿においては、おおまかに岐阜県では「カド・ケド」と略すが、他県においては、愛知県尾張地方で一部に「カド・ケド」と略す方法が見られるのみで、ほぼ類を見ないと述べた。今回の調査においてもおおよそその結果を裏付けるものとなった。

岐阜県では全県的に「カド・ケド」が一般的である。しかしながら、例外も見られなくはない。揖斐川町、輪之内町、高鷲村においては、「カンド・ケード」の形が見られる。いずれも、やや周辺部に見られることは注意を要する。筆者自身はどのような略称も用いない世代であったが、岐阜市の少し後の世代には「カンド・ケード」と呼んだとする証言もあり、「古形が周辺部に残る」がこの例にも当てはまる可能性も残されている。

一方、愛知県では、一宮市と現在は稲沢市になっている旧祖父江町ならびに、名古屋市の中川区の一部に「カド・ケド」を用いたという証言が見られる。特に一宮市では集中して使用が確認されていることは注意する必要がある。これも、教員間の

相互研修によって、岐阜という隣接地から持ち込まれた用語である可能性が高いが、同じく岐阜県に隣接する犬山などでは、調査地点が少ないため断定はできない。

愛知県では、「カンド・ケード」「カンドリ・ケードリ」についても、地域的にややかたまってみられることから、やはり隣接する地域でのこのようなことばの交流はおこなわれているものと考えられることは基本的に間違っていないであろう。名古屋市においては、省略しないという方法が、少なくとも現在の大学生世代までは優勢である。名古屋市は独自に教員採用をおこなっており、独立した学校用語を持っていても不思議ではないが、愛知県全体として見ても省略しない学校が多い。

では、なぜ岐阜県では、「カド・ケド」とまで省略するのであろうか。日本語の省略語の作り方は、「エアコン」「パソコン」の類に見られるように、前部要素の2音節と後部要素の2音節を取って省略する方法である。しかし、「カド・ケド」の場合、これが基本的には書きことばであることも大きな要因である。鉛筆で書くのと異なり、黒板にチョークを用いて書くことは、思いの外、労力を要する作業である。前述のとおり、繰り返し黒板その他に「書かれる」ものであるからこそ、省略されることも多いとも考えられよう。当然、ここには示差的であればよいとの意識も働いている。他と区別ができれば省略語は短ければ短いほど経済的なのである。また、小学校低学年に対してもわかることばである点も重要である。「カンド(リ)」「ケード(リ)」と言えばたやすいが、「カン」は「漢」,「ケー」は「計」の意味をもつ。小学校

低学年では学年別配当漢字の都合から用いることのできないこれらの漢字を避けて「かんど」「けいど」あるいは「カンド」「ケード」とすることは、あまり意味をもたない。結局「カド」や「ケド」へと行き着くには、それなりの理由があるのである。

このような理由があって、また前述のような県を越えての交流があって、愛知県尾張地方などで「カド・ケド」という語形が用いられるようになったものと推察される。

3.5 「屋内運動場」

前節までに見てきたことばは、学校で先生が主体となって用いることばである。いわば公のお墨付きのもとに学校内で用いられ、当然のように児童生徒にも教えられて理解される点で特徴的である。次に示す学校内の施設としての体育館に対する呼びかたは、これらとは異なり、具体的に目に見えるものであるという点のほかにも、いくつかの特異な様相が浮かび上がるものとして特筆すべきものである。次にこの体育館の呼びかたを見ていく。

一般には「体育館」と呼ばれる、学校内の屋根のある運動施設は、一宮市を中心に「屋内運動場」という名で呼ばれることがある。

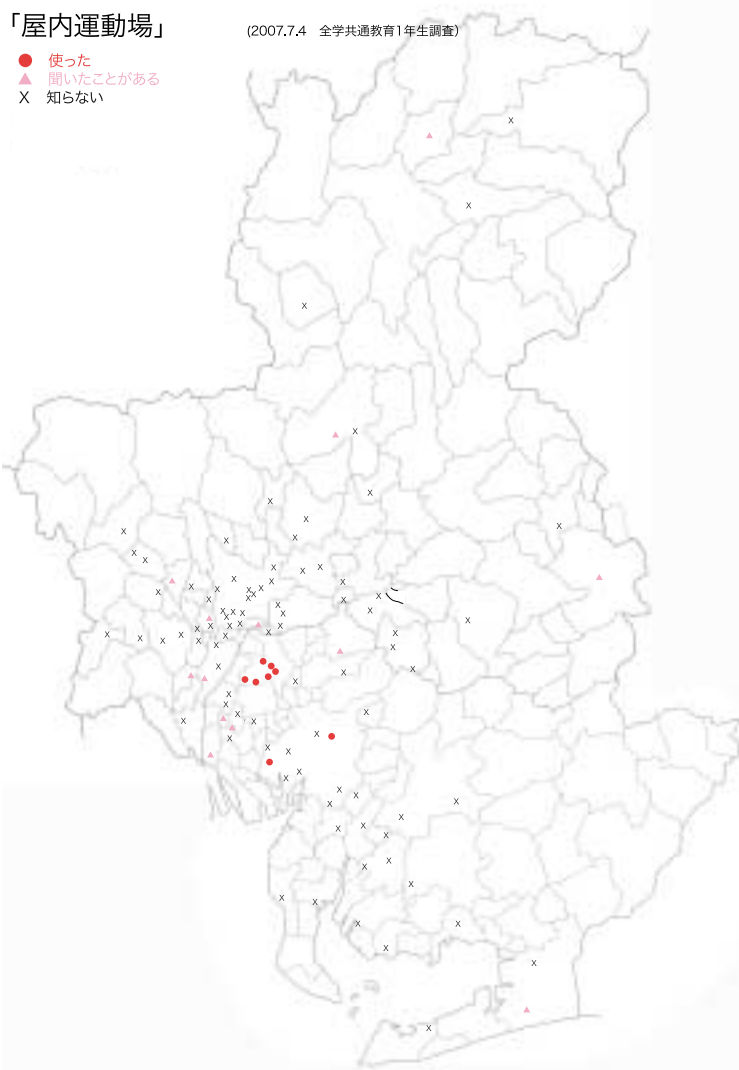
しかしながら、この「屋内運動場」は方言なのであろうか。

インターネットで「屋内運動場」を検索すると、北海道小樽市、滋賀県安土町安土小学校、鹿児島県月野小学校、佐賀県大町小学校など、全国各地に見られ、岐阜県でも、笠松町立笠松小学校、関市立武芸小学校、羽島市立堀津小学校、中津川市立付知北小学校など、数え上げれば枚挙に暇がないほど、インターネット上では情報が見つかる。

実際、加茂郡の八百津小学校では、筆者自身が、いわゆる体育館前に「八百津小学校屋内運動場」という文字が取り付けられていることを、この目で見て確認している(次頁写真)。

このように、書きことばとして、また、建築業界の用語としてはすでに一般的になってきている語が、なぜ、一宮市など限られた地域で、実際に児童生徒の使うことばとなっているのであろうか。逆に言えば、なぜ、書いてあるにもかかわらず、依然として多くの学校においては、「体育館」と呼び続けるのであろうかということを考えなければならない。

ひとつ考えられるのは公私の区別である。言い換えれば正式名称としての書きことばと、自分たちの話の中で用いられることばとの乖離が存在し、その乖離はそれほどの重要性をもって受け止められていない可能性がある点である。「電子式卓上計算機」を「電卓」と呼んだり、「1号線浅草線」を単に「浅草線」と呼んだりすることもさる



地図12 学校施設としての体育館

ことながら、学校では「夏季休業」が正式名称であるにもかかわらず誰一人として生徒は「夏季休業」とは言わず「夏休み」と呼ぶようなことは日常的にある。「屋内運動場」もそのひとつであるが、その分布が非常に地域限定のものとなっている点が特徴的であると考えられる。

一旦話しことばとして受け入れられれば、省力化による語の変化を被りやすくなる。一宮市の回答者からは「オクウン」と略して呼んでいたとの証言が複数寄せられたことも付記しておく。



3.6 「うわばき」と「うわぐつ」

学校単位でほぼ同じ語形を使うことが期待される語として、登校時に履いてくる靴とは異なる、学校内だけで用いる靴の名称がある。今回は、「上靴」と「上履き」、それぞれについて使ったかどうかを尋ねる質問をおこない、その他の語形を用いたという回答については、それが何かを問うという質問形式で調査をおこなった。

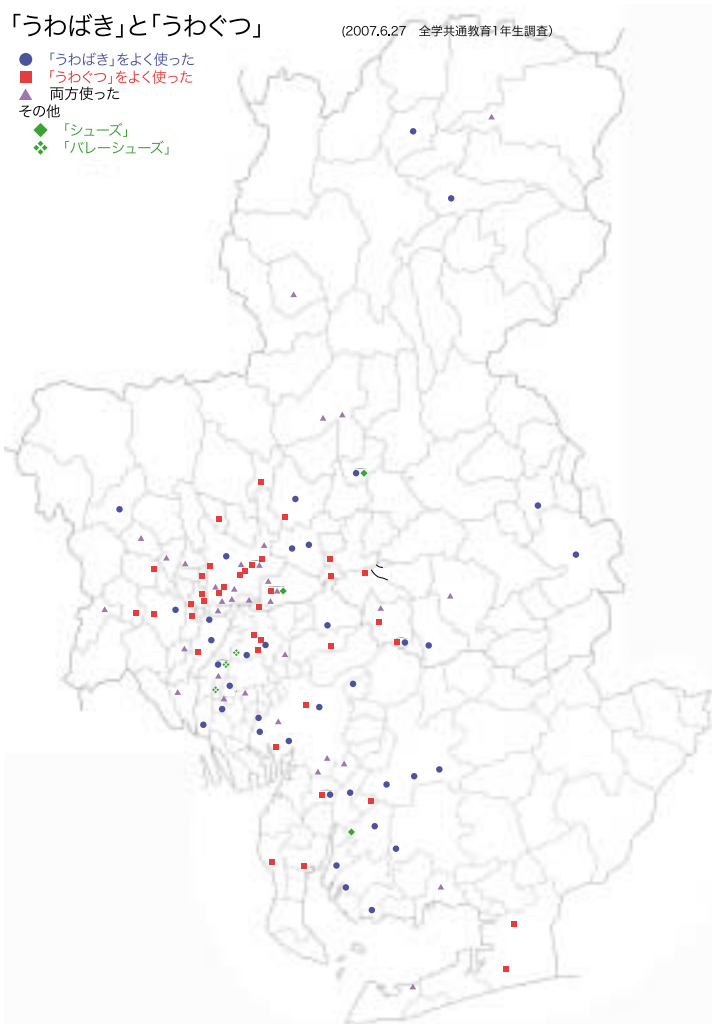
結果は、以下の通りである。

おおざっぱに見ると、岐阜県では「上靴」がやや多く、愛知県では「上履き」のほうが多いように見ることができる。

しかしながら細かく見れば、中濃や東濃では「上履き」が多く、また、愛知県でも知多半島や豊橋には「上靴」もややかたまって見られる。

このような語はどのようにして分布をなすと言うことができるのであろうか。これを解く鍵は併用語形が多いということである。つまり、同じ学校で「上靴」「上履き」どちらも用いられ、決まった形がないということである。そのような語形が決まらないということはどういうことなのであろうか。ひとつ考えることとしては、物が当たり前に存在していて、呼び名はあるけれど、それで呼ばなければならないという理由が希薄であるということである。学校の中の物で考えても、「黒板消し」か「黒板ふき」か、「筆入れ」か「ペンケース」かは、同じく、呼び名にこだわる理由がなく、音形と音形によって指し示される物との一致がなされればよいものである。「チョーク」と「白墨」ともなると、時代差を感じるかもしれないが、それであっても、他と区別する要素がそこに含まれることはない。

一宮市などに見られる「シューズ」系の語も同様かもしれない。パレエを踊るわけはなくとも「バレエシューズ」と呼ぶこと



地図13 「上履き」と「上靴」

も、学校で最初に与えられた語であれば、疑問を抱く前に使い始めてしまい、使い続けるものである。学校のことばには、このような音形と指示物との結びつきの恣意性に加えて、音形自体の確定に対する根拠の弱さということも見られるのである。

3.7 まとめ

学校という、ある意味で閉ざされた場は、そこで用いられ通用すればよいという、地域限定のことばが生まれやすい素地がある。いくら限られた場で通用すればよいとはいっても、それがまったく新たに生み出された事物であれば、一定の常識の範囲内で何と名付けようとかまわない。「一号車」などはその典型であろう。

しかしながら、従来からあることばとの連続性も、やはり大切にされなければならない。「交流」が西日本で「意見交流」として用いられやすいとしても、やはり、「班交流」ということばには疑問を抱く保護者も少なくない。

同じような例としては、最近、学校から配布されて持ち帰ってくるプリント類にも見かけられるようになった「～に関わって」がある。「～に関わって」は、「卒業発表会に関わって」というタイトルで、お知らせの内容を示す場合に用いられる。共通語としては、「～に関して」か、あるいはより簡単にいえば「～について」であり、「～に関わって」には、やはり動詞の連用形として「参加して」という意味のほかはない。この語は、研究校と呼ばれる学校の発表などでは、口頭でも聞かれることはあったが、そのような閉じた場での口頭語から、一般の児童生徒およびその保護者に向けたプリントという書きことばにまで現れるようになったのは、それほど年月の経っていない。

問題は、共通語の「親御さん」に対する方言語形としての「親さん」のありかたとは異なり、これらの語が、従来からある語に置き換わって、新しく用いられ始めたという点である。「班交流」は「グループで話し合う」ということばよりも、短くそれらしい表現であるのかもしれないが、「～に関わって」は、あえて「～について」である表現を置換する必要性は感じられない。他者のことばを咎めて、是非を指導することは研究者としてなすべきことではないが、このような語には、相互に理解するという点においては問題が少ないにしても、やはり一種の仲間内ことばであるという特徴は否定できない。児童生徒にことばを指導する教員が、用うべきことばを不断に考えていく必要はあるだろう。

4. オノマトペ

オノマトペには、音や声を模した擬音語（擬声語）と、様態を擬した擬態語とがある。擬音語であっても、実際にどのような音で聞かかはさまざまであるが、擬態語となると本当に統一された語形があるかどうか定かではない。

すでに山田敏弘（2004）に述べたが、岐阜県内では、次のようなオノマトペの方言が見られる。

「ぐさぐさ」（食物以外で柔らかいようす）、「けてけて」（自分かって。各々。バラバラ。）、「ずくずく」（びしょ濡れ）、「てれてれ」（滑らか）、「びたびた」（びしょぬれ）【以上、小林豊彦著（2003）『胞衣（恵那）弁アラカルト』より】

「すこすこせる」（肌寒い）、「すたすた」（布、紙などの引っ張りに弱い形容）、「どぶどぶ」（ぶつぶつ）【鷲見玄次郎著（1997）『岐阜県の関の方言集』より】

「こっこっこ」（雪の降る状態）、「こさこさ」（小忙しく動く）、「どべどべ」（泥泥）、「ぶとぶと」（愚痴る様）「ぶきぶき」（生々しく新鮮 例「ぶきぶきのイタドリ」）【小岩道男著（2003）『ワシの方言訛帳』より】

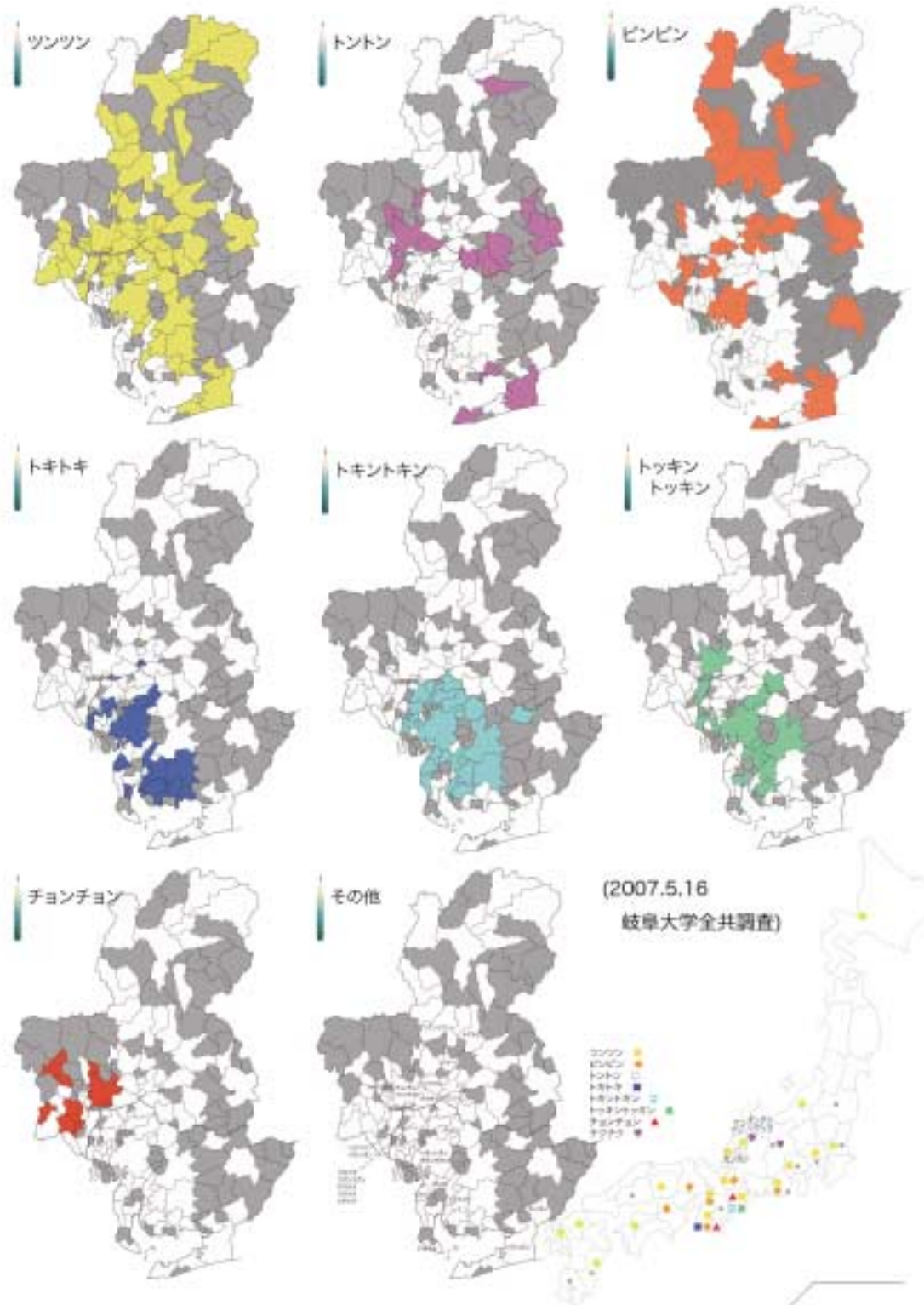
「かちかち」（いっぱい、きつい）、「つうつう」（すんなり通り抜ける状態）【二村利明著（1988）『馬瀬村の方言』より】

しかしながら、多くのオノマトペは、どのような地理的分布が見られるのかなど、詳細がわかっていない。

今回は、鉛筆の先がとがっている様をどのように言うかと、水っぽいカレーの状態を表す擬態語、および満腹を表す擬態語を調査した。

4.1 鉛筆の先がとがっている様を表すオノマトペ

すでに、山田(2006a)において、堀部友香(2004)の調査結果をもとに簡単な考察をおこなったが、今回は愛知県の分布も併せて、より大きなデータ量をベースに考察をおこなう。



地図14 鉛筆の先がとがった様を表すオノマトペ

地図6と同様に、ある語形が存在する地域を塗りつぶして示した。灰色の共通部分はデータが得られなかった市町村(平成の大合併以前の区画による)である。

全国分布を見ると、この状態を表すことばとしてもっとも広く分布するのが「ツンツン」という語形である。これが共通語であるかということには少し慎重に考えなければならない要素がある。それは、関東地方でどのような語形も使用しないという回答(地図では×で表示)が多く見られることである。「ら抜き」ことばでも、関東地方で用いられる率が低いということで、共通語としては依然として認められないということを考えれば、「ツンツン」を共通語と呼ぶことに少し慎重になる必要があるかもしれない。それを措いても、もっとも広域で確認されたのは「ツンツン」である。

東海地方と北陸地方、それに近畿地方は、オノマトベが豊富である。和歌山で「ツンツン」「トキトキ」「ピンピン」「チョンチョン」という4形が確認されたが、少ないインフォーマントから得られた語形としてはバラエティに富む。北陸地方では、東海地方と異なる語形として「チンチン」「ツクツク」「チクチク」「カンカン」「ケンケン」などが見られた。語形の方言差だけでなく、オノマトベ使用量の方言差の調査もおこなうべきであろうが、今回はそこまで至らなかった。

岐阜と愛知に関して言えば、やはり「ツンツン」がもっとも広域で認められている語形であり、これは全国の状況と軌を一にする。また、「ピンピン」も東海から近畿、徳島まで分布するように、やや広域の使用が認められるが、当該地域でも、「ピンピン」に次ぐ広域分布が確認された。さらに、他県には見られない形としての「トントン」が高山から渥美半島まで、不連続な分布ではあるが広域に確認されたことは注目に値する。

一方、地域限定の語については、中段に示した「トキトキ」「トキントキン」「トッキントッキン」が注目される。岐阜県内でも南部に点在するこれらの語形は、分布から見ると明らかに愛知県尾張地方を中心とした分布が確認される。オノマトベは、強調のために撥音を付加したり促音を挿入したりすることがよくおこなわれる。このことを考えれば、これらの語形はいずれかひとつが用いられるというわけではなく、併用され、場面に応じて使い分けられていると考えなければならない。ただ、「トキトキ」よりも強調形であると考えられる「トキントキン⁶⁾」がより広域に分布していることも見逃すことはできない。学校などでより鋭利な状態に削ってくるよう指導され、その場合に用いられやすい語形である可能性もある。

この「トキトキ」類の語源は「研ぐ」にあると考えられ、「トギントギン」も少数語形として名古屋市と北接する春日井市および南接する大府市、さらには現在稲沢市に祖父江町に確認される。「研ぐ」からすれば「トギトギ」があっても不思議ではないが、今回は得られなかった。その理由は、清音と濁音とを比較した場合に、清音のほうが鋭いイメージをもつという日本語のオノマトベの性質によるものと考えられる。「トキトキ」はすでに語源意識から離れたオノマトベとしての性質を強く帯びた語であり、「トキントキン」はさらにオノマトベの造語法によって拡張された語形である。

この「トキトキ」類によって、「トントン」は分断された分布を呈する。おそらく、古く連続した状態であったものが、名古屋発信の「トキトキ」類によって分断されたものであろう。日本全国にどのくらいこのような小規模な方言圏分布が確認されるのかはわからないが、オノマトベは、その臨時的性質故に変わりやすい側面をもっており、狭い範囲での分布を見るには適した語形なのかもしれない。

より限定された分布としては、西濃から岐阜市にかけて「チョンチョン」が分布するほか、非常にバラエティに富んだ語形が散見される。中でも、一宮市は語形が多く「ツキツキ」「チクチク」「ツクツク」「ツクンツクン」「トゲトゲ」が確認されている。無声の破裂音あるいは破擦音と狭母音との組み合わせが多い中で「トゲトゲ」は「棘」の語源意識を保持したものであろう。

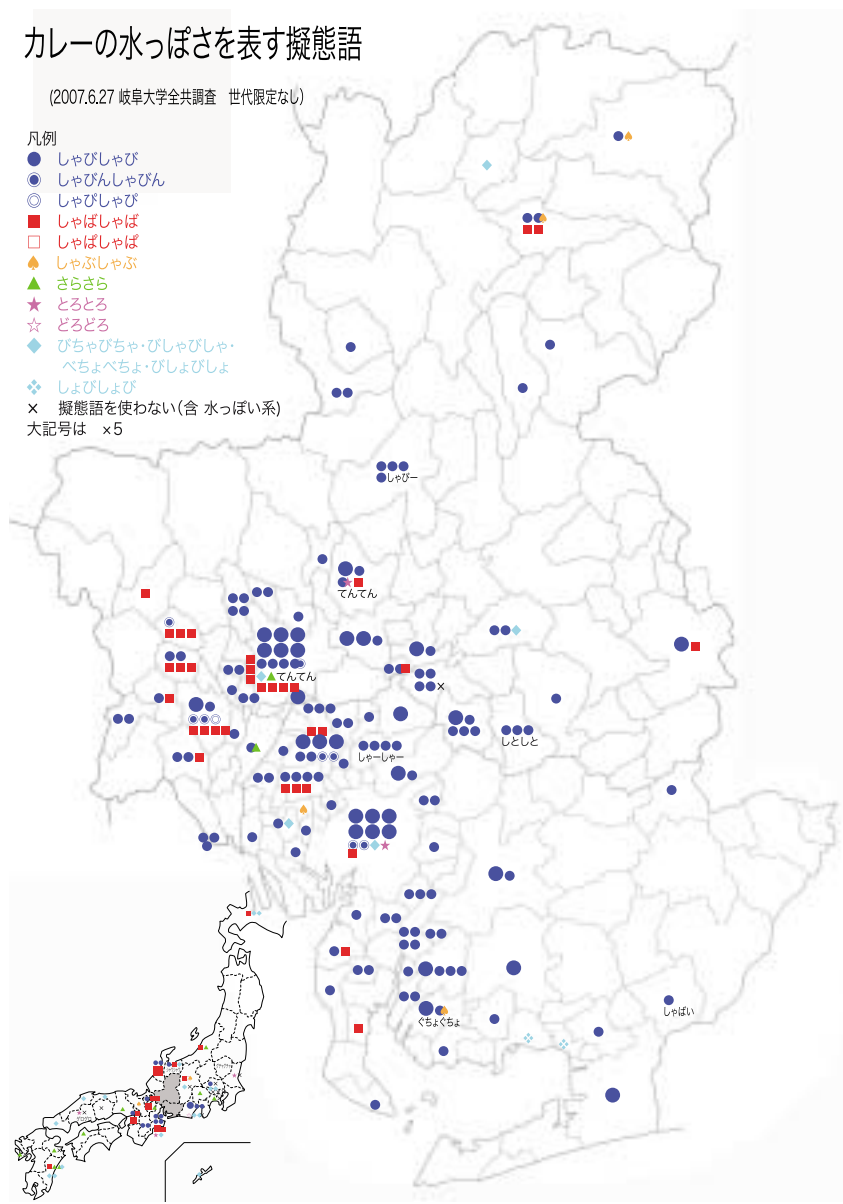
4.2 水っぽいカレーの状態を表す擬態語

水っぽいカレーを表す語と言われても、共通語では何なのか俄には答えられないということはない

6) 堀部友香(2004)では、「トキントキン」が岐阜県南部の各務原市や可児市、多治見市などにも確認できたとしている。

だろうか。そもそも共通語があると思もしないということもあるかもしれない。

しかしながら、岐阜や愛知では、即座に「シャビシャビ」などの語形が返答される。その分布は下図のようである。



地図15 カレーの水っぽさを表すオノマトペ

であった。これは、知多半島から、岐阜市や北方町などの中濃域にも見られるが、やはり西濃に多い語形であり、関西地方にも繋がる語形である。「シャバシャバ」は、地図の上では、旧海部郡や海津市のあたりで「シャビシャビ」によって分断されている。また、中津川や高山のような遠隔地、さらには長野県にも確認されることから考えれば、「シャビシャビ」が東の方から勢力を拡大してきて「シャバシャバ」を分断し駆逐したと捉えることができようか。それが事実であるとすれば、関西からの方言の流入が激しい地域としては、やや珍しい変化である。あるいは、まったく逆に、西から「シャバシャバ」が侵攻中である可能性も否定できない。経年変化を見る必要がある。

このような語形の共通語での言いかたを問われて、とまどうことは少なくないが、山口仲美編(2003: 223)によれば「しゃぶしゃぶ」の語形が見られる。「薄くて軽い物を水の中で動かす時に発する音」が第一に拳がり、続いて、「水気の多い様子」をも表すとする。「粘度の薄いシャブシャブした昔風のカレー」という実例が朝日新聞夕刊から採録されている。「シャブシャブ♠」について、今回の調査では、愛知県

「シャビシャビ」は、岐阜・愛知ともに高率で用いられているが、実際には、愛知県のほうが他形の入り込む余地がないほどの分布をしている地域が広く見られる。左下の全国地図を見ると、静岡にも多く見られる形式である。

「シャビシャビ」の変形と思われるのが、「シャピンシャピン●」と「シャビシャビ」である。郡上八幡には「シャビー」という語形も見られる。

「シャピンシャピン●」は、愛知県名古屋市、一宮市、岐阜県岐阜市、大垣市、揖斐川町に見られる。筆者自身の感覚で言えば、「シャビシャビ」を強調した形式であるが、特に被調査者の数の多い都市部に見られることから考えても、このような調査で他者との差異を示すために被調査者が提示したという可能性も考えられる。一方、大垣市で観察された「シャビシャビ」は予想された形式にはなく、詳細はわからない。

もうひとつの勢力が確認されたのが「シャバシャバ」

西尾市でと美和町，岐阜県上平村（現高山市）で1件ずつ確認されたにとどまった。

「シャビシャビ」については，中日新聞に，次のような用例が見られる。

- ・シロップはドロドロでもシャビシャビでもいけない。うまく氷に絡ませるのが難しかった（中日新聞2007年8月2日尾張版）
- ・知多湾に臨む愛知県武豊町で生まれ育った主婦佐藤和子さん(62)は，煮物に今もたまりを使う。「まるやかさが違いますよ」。とろけるような，コクのあるおいしさ。「シャビシャビしたしょうゆでは出ない」（中日新聞2004年11月21日）
- ・(アイスクリームを作る際に)「振り方が足りなかったのか，シャビシャビだあー」と笑ったりしていた。（中日新聞1999年5月20日）

興味深いのは，2番目の記事は，そのまま，東京新聞に後日転載され，首都圏でも読まれた点である。

朝日新聞でも，「シャビシャビ」を用いた記事（いずれも1998年のもの）が5件（うち2件は重複）ヒットした。

- ・先週の「赤と黒のシャーベット」は，黒砂糖を煮溶かして作った(1)ドロリ(2)トロリ(3)サラリ(4)シャビシャビの蜜(みつ)の濃度によって印象が違います。（朝日新聞夕刊1998年7月10日「野寺夕子のとんでも料理」）
- ・トマトドレッシングは，いわば冷製スープでして，シャビシャビかけるといよりは団子をどっぴりとつけて食す，というもの。（朝日新聞夕刊1998年9月11日「野寺夕子のとんでも料理」）
- ・「パンの耳プディング」です。耐熱皿に卵を割り入れ，かき混ぜる。大体三倍量の牛乳を注ぎ，たっぷり砂糖を入れ，かき混ぜる。パンの耳を浸し込み，ふやけるまで，しばし待つ。干しブドウとバターを散らしてオーブントースターへ。表面カリッ中シットリに焼き上げたいもの。シャビシャビ感が多少残っても，ナーニ，食べることは可。ですが，焼き過ぎぐらいが美味。（朝日新聞夕刊1998年11月20日「野寺夕子のとんでも料理」）

すぐに気づくように，いずれも同じ人が書いた記事である。実は，この野寺夕子氏は，岐阜県生まれで，岐阜大学農学部を卒業後，京都など関西で活躍するフリーライターである⁷⁾。このようなことから，当地出身者が「シャビシャビ」を方言とは捉えていない様子が窺える。

少数語形については，「サラサラ」や「ベチョベチョ類」が見られる。これらは，全国各地には点在する語形である。当地特有の形式としては，蒲郡市と東に接する御津町に「ショビショビ❖」，美濃市出身者と同じ家庭の岐阜市出身者から「テンテン」という語形が得られた。いずれも詳細はわかっていない。

7)「フルル Kansai」ホームページ（<http://www.fururu.net/keyword/%CC%EE%BB%FB%CD%BC%BB%D2>）による。

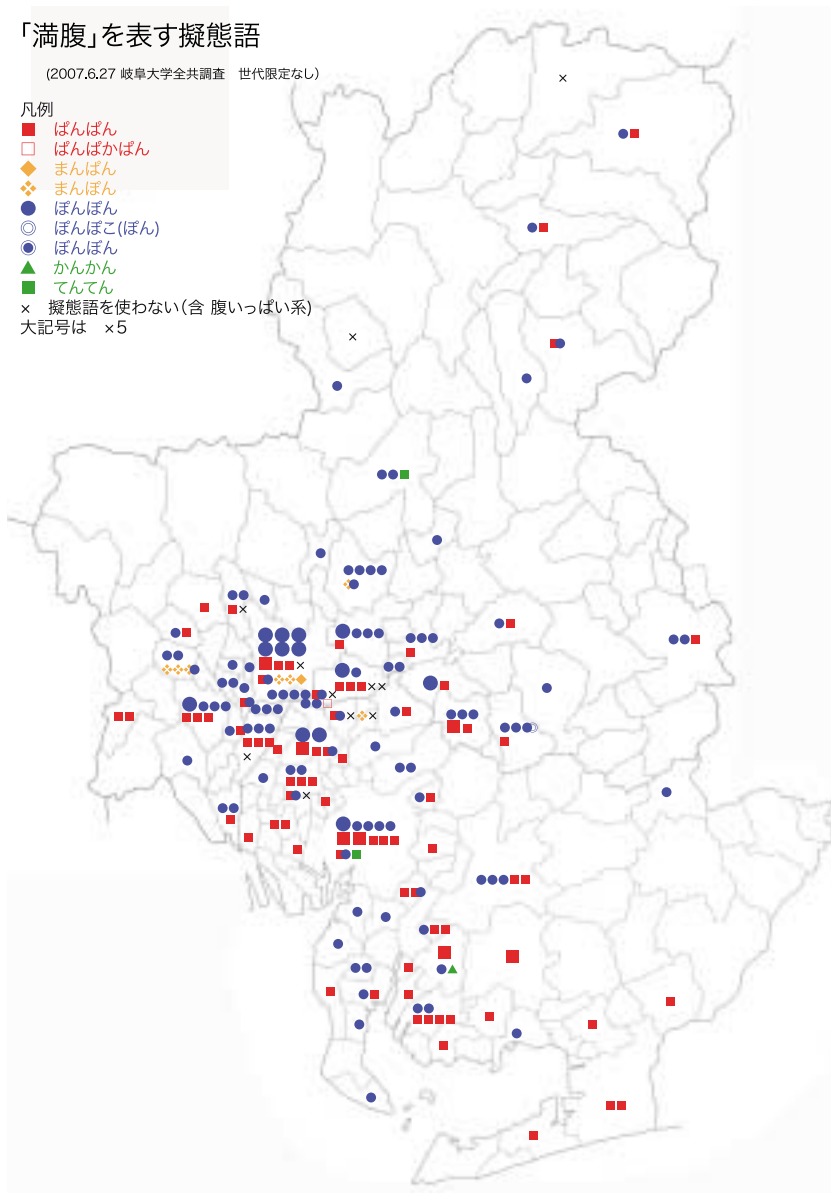
4.3 満腹を表す擬態語

満腹を表すオノマトペについても、その分布は複雑である。ある人は、岐阜では「ぼんぼん」と言うがこれは他の地域では通じないと言い、一方、「ぼんぼん」が他の地域でも通じると言う人もいる。さらに、岐阜でも「ぼんぼん」以外を用いるという話も聞く。いったい、何が実態を正しく表しているかは、個人的な証言を集積しても見えてこない。

「満腹」を表す擬態語

(2007.6.27 岐阜大学全共調査 世代限定なし)

- 凡例
- ぼんぼん
 - ぼんぼかぼん
 - ◆ まんぼん
 - ◇ まんぼん
 - ぼんぼん
 - ◎ ぼんぼこ(ぼん)
 - ぼんぼん
 - ▲ かんかん
 - てんてん
 - x 擬態語を使わない(含 腹いっぱい系)
 - 大記号は x5



地図16 満腹である様子を表すオノマトペ

回答数が少なかった地域と例外的な岡崎市を除いて、ほぼ全ての地域で、どちらの語形も見られるということはどのようなことなのであろうか。もちろん、今回の調査に関しては、世代的な限定をおこなっていないことも要因のひとつとして考えなければならないが、それでも回答者の多くを占める大学生世代だけを見ても、おおまかな傾向は大きく変わるものではない。このような明確な等語線が引けるといよりは緩衝域を持ちながら推移的に分布する方言語形としては他にどのような語形に見られるものなのであろうか。

残念ながら、このような密度で調査がおこなわれたものを知らない筆者の管見を恥じるべきであるが、現代の言語とは移行域を有しながらゆるやかな境界を有するものもある可能性もある。今後、世代を限定しながら、またさらなる詳細な地図を描きながら調査をおこなう必要がある。

「ぼんぼん」と「ばんばん」については、たしかに、岐阜市でも「ばんばん」を使わないわけではない。

では、数で表してみたらどうであろうか。結果は、左の地図のとおりであった。

左の地図のとおり、数件の回答が見られた地域のほとんどで併用が得られた。岐阜市では、「ぼんぼん」が30回答あったのに対し、「ばんばん」が7回答、両形を併用する回答が1つあったほか、「まんぱん」「まんぼん」などの形式も見られた。一方、名古屋市ではどうかと言えば、「ぼんぼん」が9件、「ばんばん」が13件、両形併用が1件、ほかに「てんてん」が1件であった。少数語形については別に見ることとし、まずは、「ぼんぼん」と「ばんばん」だけを見ていくと、確かに岐阜県では「ぼんぼん」のほうが件数として上回っており、愛知県では、尾張北部と知多半島ではやや「ぼんぼん」が優勢であるが、名古屋市や名古屋市の西に接する旧海部郡や三河地方では「ばんばん」が優勢であることがわかる。

筆者自身の内省では、「ぼんぼん」は満腹を表す際に用いるが、表面的に張った腹の様子には「ぱんぱん」を用いる。つまり、あるできごとに対して、その捉え方が異なるが、両形とも用いられる場面が存在するのである。このことが併存を許容する一要因になっていると考えられる。

なお、「まんぱん」「まんぼん」については、「満」と「ぱんぱん」「ぼんぼん」との混交形と考えられる。置語的語構成をひとつの特徴とするオノマトペとしては異質な語構成である。なぜ、「ぱんまん」「ぼんまん」でなく「まん」で始まるかといえは、「満タン」からの類推であろう。

4.4 まとめ

オノマトペは、事物を指すわけではない、音や様子を指し示すことばである。同じ音を捉えているから同じように聞き語として表現するかといえは、当然、そのようなことはない。雀の鳴き声を「チュンチュン」と言うところと「チューチュー」と言うところがあることは、『日本方言地図』にも採録されよく知られた事実であるし、同じように鳴いている(と思われる)動物の鳴き声も、言語によって捉え方が異なることを考えれば、当然である。音のある擬音語ですらそうであるから、擬態語はより一層、同じことばで捉えなければならない必然性はない。確かに、母音、子音それぞれに聴覚的な印象(聴覚イメージではなく感覚的印象)が存在し、「ピンピン」や「ツンツン」など、狭母音や舌尖の破擦音が鋭い印象を与えていることは事実であるが、それらは選択の範囲が示されるのみであって、語を確定する要因とはならない。その選択される範囲の中で考えれば、比較的広い母音と同じ子音の組み合わせである「ぼんぼん」と「ぱんぱん」には、音響的に大きな差があるわけではなく、社会的慣習によって選択されているだけである。「うわばき」と「うわぐつ」の場合も同様であるが、なぜ、どちらを用いても同じものとして捉えられるものと違うものとして捉えられるものへと分化するのか。ひとつには、いわゆる機能負担量のような、社会の中で区別されるための重要性のようなものが存在するのではないか。ひとつの事物を指すのに複数の語形が存在することは、ひとり、経済性の問題だけでなく、混乱を来すことも予想される。しかしながら、混乱を来すことが予想されない場合には、経済性はさほど問題とならないことは、省略語とその元のことばとの併存を考えてもわかることである。つまり、オノマトペであっても、「うわばき・うわぐつ」の例であっても、社会的に重要であるとは言い難いことばであり、また、それらが別の形式で言われたとしても社会的な混乱を招くとは考えられないものであり、そのために、同じ地域に複数の語形が存在するものと考えられよう。

5. おわりに

本考察の目的には、もうひとつ、教養教育のありかたについて、大人数講義をより能動的に参加できるものにしていく方法論の考察が隠されていた。

本講義は、毎年、180名を超える学生が受講を希望する。平成19年度は、最初、300名近い学生が教室に殺到し、さすがにそれだけを受け入れることはできず、160名まで絞り込んだが、いずれにしても、大人数教室でいかに受身に留まらない態度を作るかに腐心をした。ひとつは、課題をたくさん盛り込んだ教科書の作成(山田敏弘2007b)であり、もうひとつは、毎回の宿題という形で出される調査であった。教科書はとにかくノートをよく取るように奨励し、前学期の途中と最後にノートチェックを全員に対しておこなうという方法を取り入れ、課題を含めた授業への取り組みを評価の対象とした。また、毎回の調査の結果は、次の授業時に紙に書いて提出させ、それをさらに翌週までにデータ入力をおこない、地図化して示すという気の遠くなるような作業を続けてきた(本考察で示した地図のすべては、そのような地図化されたデータを基にしている)。いずれも、学ぶ姿勢を育むための方略である。

確かに、学生が調べた調査は、手法に関して信頼性が十全なものと言えるかと問われれば、それは心許ない。また、すべての地域を網羅的に調べられたわけでもない。しかし、「所詮、学生がやったものだろう」という批判は、やりかた次第で変わっていくものであるし、何より実践を通じて手法を学んでいくことが目的である授業である。今回、本稿で取り上げた項目は、学生たちがもっとも乗り気になって調

査ができた項目でもあり，より学生たちが能動的に授業を受けるきっかけとなった。今回は，このような学生の主体的学習姿勢の醸成と方言研究のための基礎データの採取という二兎を追った。後者の成否は読者の判断に委ねたいが，前者については過去よりもよい成果を得られたと自負するものである。

次稿では，今回分析に手が回らなかった文法事項の考察を中心に考察をおこなう予定である。

【付記】

本研究は，岐阜大学平成19年度活性化経費（教育）による研究成果の一部である。

【参考文献】

- 佐藤仁志（2007）「放課ってなんだ?? 休み時間を何と呼ぶか」岐阜大学共通教育2007年度前学期「言語学」レポート（『ぎふ・ことばの研究ノート』7に収録予定）
- 岸江信介他編（2001）『名古屋 - 伊勢間グロットグラム集』
- 堀部友香（2004）『岐阜県におけるオノマトペの方言』2003年度岐阜大学教育学部卒業論文
- 山口仲美編（2003）『暮らしのことば 擬音・擬態語辞典』講談社
- 山田敏弘（2004）『みんなで使おっけ！ 岐阜のことば』まつお出版
- 山田敏弘（2005）「童戯「ポコベン」の方言学的考察」『岐阜大学教育学部研究報告人文科学』54 - 1
- 山田敏弘（2006a）「まっとみんなで使おっけ！ 岐阜のことば 第18回 擬音語・擬態語1」『中日新聞ショッパ-ぎふ』2006年2月号
- 山田敏弘（2006b）「岐阜大学全学共通教育・岐阜県国際ネットワーク大学コンソーシアム共同授業「岐阜県方言のしくみを学ぶ」の問題点と改善の方法」『岐阜大学教育学部研究報告教育実践編』8
- 山田敏弘編（2007a）『ぎふ・ことばの研究ノート6』私家版
- 山田敏弘（2007b）『みんなで使おっけ！ 岐阜のことば いっしょに調べよまい 日本のことば』岐阜大学教養教育言語学 教科書